



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	保育者たちがふり返る“COVID-19パンデミック”の1年目
Author(s)	及川, 智博; Oikawa, Tomohiro; 中島, 寿宏 他
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 140, 117-154
Issue Date	2022-06-25
DOI	<a href="https://doi.org/10.14943/b.edu.140.117">https://doi.org/10.14943/b.edu.140.117</a>
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/86262">https://hdl.handle.net/2115/86262</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	09-1882-1669-140.pdf



# 保育者たちがふり返る “COVID-19パンデミック”の1年目

及川智博<sup>1</sup>・中島寿宏<sup>2</sup>・岩谷 樹<sup>3</sup>・井内 聖<sup>4</sup>・吉川和幸<sup>5</sup>・川田 学<sup>6</sup>

【要旨】本研究は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミックの1年目の終わりに、保育者たちがその1年間の保育について、何をどうふり返ったかを検討した。29の都道府県に在住する保育者191名の自由記述内容について、若手・中堅、熟練者、管理職という3つのキャリア別にテキストマイニングを行った。その結果、共通する頻出語は「子ども」「保育」「行事」「感染」であった。熟練者においては「マスク」が、管理職においては「保護者」がより頻出した。さらに、共起ネットワーク分析の結果に基づき、キャリア別に特徴的なふり返りを整理した。若手・中堅では、「日々の保育」「行事への対応」「気づきと意味づけ」の3つ、熟練者では、「日々の保育と発達への見直し」「保育・行事の見直しと保護者」の2つ、管理職では、「園としての感染対策と保育」「行事と保護者」「職員への視点」「保育の工夫と見直し」の4つを抽出し、それぞれに典型的な記述内容を引用しながら考察した。最後に、保育者たちのふり返りから“アフター・コロナ”を見据えた示唆を整理した。

【キーワード】新型コロナウイルス感染症（COVID-19）、パンデミックの1年目、保育者、ふり返り

「職員紹介の写真を見ていた2歳児クラスの子が、私の写真を指差しながら私の顔を見て首をかしげるので「どうしたのかな？」とっていたら、「マスクないね」と一言。そうか、この子は私がマスクをしていない場面を写真以外で見たことがないんだと思ったのでした。早くマスクがなくても話せる日が来ることを願っています」（公立保育所、女性、経験37年、園長・所長・施設長）

## 問題と目的

### 1. はじめに

本稿の作成時点において、日本における新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミックは3年目に入りつつある。次々に現れる変異株の流行は、2022年1月～2月において日

<sup>1</sup> 名寄市立大学・講師、北海道大学大学院教育学院・博士後期課程

<sup>2</sup> 北海道教育大学札幌校・准教授

<sup>3</sup> 北海道大学大学院教育学院・修士課程

<sup>4</sup> 学校法人リズム学園・学園長、北海道文教大学・特任教授

<sup>5</sup> 国立特別支援教育総合研究所・総括研究員

<sup>6</sup> 北海道大学大学院教育学研究院・准教授

本での第6波となり、ピーク時には第5波までとは比べ物にならない10万人に上る一日当たり新規感染者数が報告されるに至っている。加えて、第6波では10歳以下の子どもの陽性者の増加を特徴とし、全国各地の学校や保育現場で学級閉鎖や休校・休園を余儀なくされる事態も広がった。

このように、新型コロナウイルスの社会的影響は現在進行形であり、近未来を予測することも容易ではない。子どもの成長発達と保護者の社会経済活動を下支えしている保育現場（保育所、幼稚園、認定こども園等）では、感染対策と子どもの経験・発達および保護者の就労の保障とのバランス取りに苦慮しながら、ソーシャル・ディスタンスを確保しきれない、あるいはそれによる損失の大きい年齢期の子どもの保育を継続するために、日夜綱渡りを続けている。

一方で、“未知のウイルス”として暗中模索であった1年目（日本では概ね2020年1月から2021年3月末）に比べると、現在は、感染拡大の波の動態、社会経済活動やワクチン接種との関連について多少の予測が立つようになったのも確かであろう。いわゆる“アフター・コロナ”に向けて、保育現場でも2022年4月からの1年間を展望する時期に来ている。その際、あらためてパンデミック1年目をふり返ることにも、いくつかの意義があると考えられる。第一に、未曾有の事態に向き合った最初の経験を整理しておくことは、次の類似の出来事に対する予防的な構えを形成しうる。第二に、我々の社会でありがちな「喉元過ぎれば熱さ忘れる」という精神風土に抗することである。後述する調査結果で示すとおり、保育現場は未知の状況にただ受動的に翻弄されただけではなく、渦中においても子どもの経験と発達を守るために様々な工夫を行い、その中で日常の保育や行事等の見直しをする好機と意味づけた現場も少なくない。パンデミック1年目をふり返り、危機の中で得た気づきを記録することは、“アフター・コロナ”の保育の力量形成と質の向上のために必要な視点を提供するだろう。

## 2. COVID-19感染拡大の推移と保育をめぐる調査

本稿では、2020年1月16日に最初の国内陽性者が確認されてから2020年度末（2020年3月末）を、「COVID-19パンデミックの1年目」と位置づける（以後、この期間を「1年目」と記述することがある）。この期間における、国内の保育に関わるCOVID-19への対応についての主要な動向をTable1に整理した。

1年目は“未知のウイルス”に対して、政府や自治体行政から矢継ぎ早に通知や宣言が発出され、保育現場でも情報が錯綜した。『月刊 保育情報』（N0.532）の整理によれば、最初の緊急事態宣言が発出された直後の2020年4月8日には、全国で168か所の保育所等<sup>7</sup>が臨時休園した（保育研究所、2021）。幼稚園については、他の学校種に出された休業要請の対象外とされたものの、文部科学省「新型コロナウイルス感染症に関する学校の再開状況について」（2020年6月3日公表）によれば、2020年4月22日時点で公立の73%、国立の94%、私立の74%が休園（臨時休業）していた。これ以降、1年目においては上記の休園数を超えることはなかった。

最初の緊急事態宣言において、保育・幼児教育に関連する民間団体や研究機関によって、現場の実態に関する複数の調査が行われた。最も動きが早かったと考えられるのが全国私立保育園連盟（現・全国私立保育連盟）で、2020年4月23日～30日にインターネット調査により全国の3,147か所の保育施設から回答を得ている（公益社団法人全国私立保育園連盟調査部、

<sup>7</sup> 認可保育所、保育所型認定こども園、地域型保育事業所、へき地保育所を含む。

Table 1 保育に関わる国内のCOVID-19をめぐる主要な動向（2020年から調査実施時まで）

日付	主な事項
<b>2020年</b>	
1月15日	日本国内で初めてCOVID-19の感染者を確認(1月16日に厚生労働省が発表)。
31日	厚労省より事務連絡「保育所等における新型コロナウイルスへの対応について」通知。
2月18日	厚労省より事務連絡「保育所等において子ども等に新型コロナウイルス感染症が発生した場合の対応について」通知。各地域の判断により保育所の臨時休園が可能となる。
27日	安倍晋三首相が全国すべての小中高校値特別支援学校に臨時休校を要請。これを受けて厚労省は事務連絡「新型コロナウイルス感染症防止のための学校の臨時休業に関連しての保育所等の対応について」を出し、保育所を「原則として開所」するよう求めた。また、内閣府・文部科学省も同様に、幼稚園・認定こども園は休園の対象としない旨を通知。
28日	北海道が独自に「緊急事態宣言」を発令。
3月5日	厚労省は保育所で感染者が出た場合等について触れた事務連絡「保育所等における新型コロナウイルスへの対応にかかわるQ&Aについて(令和2年3月5日現在)」通知。
13日	都道府県知事が外出自粛や休校等の要請を行うことを可能とする「新型コロナウイルス等対策特別措置法」が成立。
4月7日	政府は7都道県に「緊急事態宣言」発令(その後、16日に対象を全国に拡大したほか、13都道府県は「特定警戒都道府県」に指定)。厚労省は事務連絡「緊急事態宣言後の保育所等の対応について」を通知し、保育所は原則として開所としつつ、都道府県知事から要請が出た場合は休園や保育提供の縮小を検討するよう指示。これを受けて、首都圏の自治体を中心に登園自粛要請や休園による保育の縮小が進んだ。
9日	全国保育団体連絡会が「保育所等における新型コロナウイルス感染症対策に関わる要請書」を首相・厚生労働大臣に提出し、保育所・保護者への支援体制強化等を要請。
11日	国内の1日あたりの感染者が当時最多となる700人を超える。
16日	全面休園している保育所等が全国で168か所に上る(厚労省集計、都2区を除く)。
5月7日	国内の1日あたりの感染者が96人となる。100人を下回るのは3月30日以来。
14日	政府は39県で緊急事態宣言を解除(その後、25日に全国で解除)。宣言の解除を受けて、各自治体の判断により、休園措置が解除されるなどして保育の再開が進む。
7月3日	国内の1日あたりの感染者が200人を超える(200人を超えるのは5月3日以来)。その後、29日には1000人を超える)。
9月16日	安倍内閣が総辞職。菅義偉内閣が発足。
11月18日	国内の1日あたりの感染者が当時最多の2201人に上る。その後、年内における1日あたりの感染者は概ね1000~4000人台を推移するようになる。
<b>2021年</b>	
1月7日	政府は1都3県(東京・埼玉・千葉・神奈川)を対象に緊急事態宣言を発令(その後、13日に対象地域を11都府県に拡大)。厚労省は事務連絡「緊急事態宣言が出された地域における保育所等の対応について(周知)」を通知し、昨年4月7日付けの事務連絡は適用せず、保育所は感染防止策を徹底しつつ原則開所するように指示。
14日	全面休園している保育所等が、全国で58か所に上る(厚労省集計)。50箇所を超えるのは2020年5月以来。
2月26日	緊急事態宣言が首都圏を除く6府県で解除(首都圏1都3県は3月18日に解除)。

2020a)。また、東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センターは、2020年4月30日～5月12日にウェブアンケート方式により44都道府県の保育・幼児教育施設から954名の回答を得ている（東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター，2020）。この2つの調査が、全国を対象として実施された最初期の調査であると考えられる。

その後、同年5月から10月には更に様々な団体による調査が行われた。すなわち、5月4日～14日に全国保育園保健師看護師連絡会（2020）、5月15日～6月6日に全国認定こども園協会（2020）、5月18日～26日に全国保育協議会・全国保育士会（2020）、7月15日～8月15日にこども環境学会（2020）、9月25日～10月7日に全国保育協議会（2020）などである。なお、全国私立保育園連盟は、4月の調査の後、感染拡大の第1波をふり返るために、同年6月23日～30日に「新型コロナウイルス感染症に関する調査2～第1波感染期間をふり返る」（公益社団法人全国私立保育園連盟調査部，2020b）を、2021年6月17日～30日には「新型コロナウイルス感染症に関する調査2021」（同，2021）を実施している。東京大学発達保育実践政策学センターも、2021年8月～9月に園長（所長・施設長）を対象としたパネル調査を開始し、継続している（東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター，2021，2022）。このほか、野澤・淀川・菊岡・浅井・遠藤・秋田（2021）により、2020年8月31日までに公表された国内外のCOVID-19と保育・幼児教育との関連で行われた調査が総覧されている。

上記の調査や論文以外にも、各地の養成校教員などにより、地域の保育施設における初期の実態について、2021年1月～3月に一定数が報告されている（石井・木村・横山，2021；宮澤・田宮，2021；溝田・佐藤，2021；七木田，2021；小田・橋浦，2021；及川，2021；横井・鈴木，2021等）。

COVID-19パンデミックの1年目に収集されたデータに基づくこれらの報告は、後年の歴史的検討に資する貴重な初期資料となるだろう。パンデミック2年目以降も、引き続き大小さまざまな調査が行われ、順次報告が上がってきている状況にある。その都度の実態を記録に残すことの重要性は言を俟たないが、同時に必要と考えられるのが、それぞれの時点から過去をふり返る省察型の調査である。本稿では、パンデミックの1年目を終えようとする時期—それはつまり4月からの新しい年度に向けた展望を形成する時期でもあるが—に、保育者たちが何をどうふり返っていたのかに焦点を当てる。新しい変異株が出現しつつも、ワクチンや経口薬の開発が進み“アフター・コロナ”が見えてきた時期だからこそ、混乱の中にも希望を見出そうとした1年目のふり返りに学ぶことがあるだろう。

## 方法

### 1. 調査内容と手続き

調査は2021年3月7日～31日にかけて、Google Formsを利用した無記名式アンケートにより実施された。調査は、全国規模もしくは地方に所在する保育団体や保育者の自主学習組織、保育関係の出版社によるオンラインイベントへの参加者、および著者発信のSNSを通じて全国の保育者に依頼する形式で実施された。なお、Figure 1はCOVID-19の感染拡大の推移と本調査の実施時期との関係を表すものである。

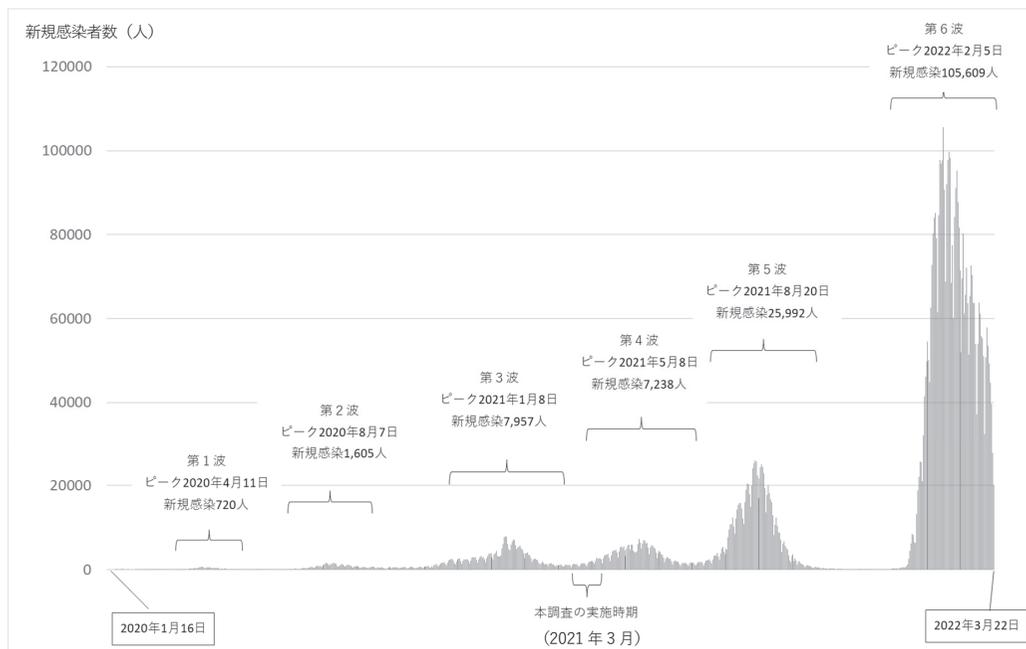


Figure 1 新型コロナウイルス感染症（COVID-19）新規感染状況の6つの“波”と本調査の実施時期

アンケートは回答者への負担も考慮し、以下の構成による、自由記述1項目のみの短い内容とした。まず、1ページ目で調査目的および後述する倫理的配慮・個人情報の保護について説明した後、2ページ目ではフェイス項目として協力者の属性（所属園の都道府県、性別、園の設置形態と種類、保育歴、役職、2020年度に主として担当していた子どもの年齢）について尋ねた。その後、3ページ目にて、2020年度における1年間の保育を振り返ってもらうために以下の質問文を提示し、自由記述による回答を求めた。

「新型コロナウイルス感染拡大への対応が求められたこの1年間の保育をふりかえて、今あなたが思うこと・感じていること・考えていることはどのようなことですか。保育場面でのエピソード等がありましたら、ご回答いただける範囲でけっこうですので教えていただければ幸いです。」

## 2. 倫理的配慮

以下の内容について、アンケートの1ページ目にて文章で回答者に説明した。まず倫理的配慮として、調査への参加は任意であり自由意思に委ねられていること、途中で回答をやめることができること、答えたくない質問には答えなくてもよいこと、調査に協力しないことによる不利益は一切ないことを説明した。また、個人情報の保護として、回答は個人・園が第三者に特定できない形式に変換処理されることを説明した。最後に、結果については論文等で公表すること、および以上の点についてアンケート回答の送信をもって同意したものとする旨を説明した。

## 3. 調査協力者

全国29都道府県及び海外の保育者等から217件（うち有効回答数199件）の回答を得た。本研究ではこのうち、看護師や事務職員、預かり保育のみを担当している保育者、また海外の保育者による回答を除いた、日本国内の園長・所長・施設長、副園長・教頭、主任保育士、副主任保育士、クラス担任、フリー・加配保育士による回答191件を分析に使用した<sup>8</sup>。内訳は、1年目～15年目の若手・中堅保育者の回答が31件（16%）、15年目以上の熟練保育者の回答が26件（14%）、そして主任保育士以上の管理職による回答が134件（70%）であった<sup>9</sup>。また、園種別の回答内訳は、認定こども園110件（58%、内公立2件）、認可保育所46件（24%、内公立10件）、幼稚園29件（15%、内国公立6件）、その他6件（3%）であった。

#### 4. 分析手続き

アンケートにより得た自由記述回答の分析は、テキストマイニング（Text Mining; 以下、TM）を用いて回答傾向の大勢を掴んだ後、自由記述1つひとつの内容に立ち返り考察する形式で実施した。TMの分析ツールは、頻出語の確認についてはNVivo（QSR International）を、共起ネットワークの生成についてはKH Coder（樋口、2020）を、それぞれ使用した。TMは以下の手順で進めた。まず、分析前に全回答について、(1)誤字脱字の修正、(2)箇条書き記号・改行・見出し語の削除、(3)漢字変換の統一（例：「子供」「子ども」「こども」は「子ども」に統一）、(4)文章を敬体に統一の、4つの処理を行った。その後、分析ツールを使用して、各キャリア別の頻出語および共起ネットワークについて整理した。以下ではこのTMの結果を、若手・中堅保育者、熟練保育者、そして管理職別に記載した後、各キャリア別に特徴的な回答に立ち返り考察する。

<sup>8</sup> なお、本調査内のフェイス項目における回答者の役職は、「園長・所長・施設長」、「副園長・教頭」、「主任保育士」、「副主任保育士」、「クラス担任」、「フリー・加配保育士」の6項目のなかから選択してもらった。また、各保育施設における役職名の相違などを含めて、選択項目のいずれにも該当しない役職名については「その他」の欄に自由に記載してもらった。自由記載の役職については、著者間で協議のうえ、「若手・中堅保育者」と「熟練保育者」、もしくは「管理職」のいずれに該当するかを判断した（例：「主幹教諭」は「主任保育士」と同様に管理職とした）。また、結果と考察内における自由記述の分析に際して、自由記載の役職はそのまま表記している。

<sup>9</sup> 本研究における「若手・中堅保育者」と「熟練保育者」との区分は、足立・柴崎（2010）の議論をもとに設定した。足立・柴崎（2010）によれば、保育者は満15年目を超えてくる段階で、日常的に生じるもの以外の複雑な問題に対しても対応できるようになるほか、保護者や地域、また行政制度にも深く関わることができるようになってくるという。そこで、COVID-19感染拡大という未曾有の1年間に対する保育者のふり返りに焦点を当てるといった目的との整合性・妥当性から、本研究では「若手・中堅保育者」と「熟練保育者」を、保育歴満15年目とそれ以上で分類することとした。

## 結果と考察

### 1. 自由記述データ中の頻出語

若手・中堅保育者，熟練保育者，管理職による自由記述データの頻出語上位15語をTable 2に示す。3群に共通して多くみられた頻出語として，「子ども」「保育」「行事」「感染」の4語が挙げられた。また，各群に特徴的な頻出語として，若手・中堅保育者と熟練保育者には共通して「マスク」が，管理職には「職員」が，熟練保育者と管理職には共通して「保護」「者」すなわち保護者が挙げられた。

Table 2 若手・中堅/熟練/管理職の自由記述データの頻出語(上位15語以内)および出現回数

若手・中堅保育者 (N=31)			熟練保育者 (N=26)			管理職 (N=134)		
抽出後	出現回数	重み付け%	抽出後	出現回数	重み付け%	抽出後	出現回数	重み付け%
子ども	46	3.07	子ども	45	3.17	保育	190	2.50
保育	26	1.74	保育	30	2.11	子ども	189	2.49
行事	22	1.47	者	25	1.76	者	177	2.33
コロナ	20	1.34	マスク	21	1.48	保護	123	1.62
感染	20	1.34	保護	20	1.41	園	118	1.56
者	19	1.27	行事	18	1.27	行事	94	1.24
マスク	16	1.07	園	16	1.13	コロナ	78	1.03
多い	15	1.00	会	13	0.92	感染	78	1.03
人	11	0.73	感染	13	0.92	職員	55	0.72
園	11	0.73	コロナ	12	0.85	いく	50	0.66
消毒	11	0.73	多い	12	0.85	くる	45	0.59
状況	11	0.73	大切	10	0.70	良い	44	0.58
大切	9	0.60	とても	9	0.63	対応	43	0.57
機会	9	0.60	にとって	9	0.63	ぬ	42	0.55
職員	9	0.60	対策	9	0.63	たい	38	0.50
良い	9	0.60	生活	9	0.63			
			良い	9	0.63			

### 2. キャリア別の共起ネットワークについて

若手・中堅保育者，熟練保育者，管理職それぞれの自由記述データの大きな内容を把握するべく，語同士の関連を示す共起ネットワークを出力した。それぞれの共起ネットワークをFigure 2～4に示す。共起ネットワークにおいて，語を囲む円の大きさは自由記述データにおける出現回数 (Frequency) を示している。また，各語を結ぶ線の種類については，KH Coderによる自動グループ分け (サブグラフ検出) の際に同じサブグループに含まれた語同士は実線で，関連がありつつも異なるサブグループに含まれた語同士は点線で結ばれている。なお，語と語を結ぶ実線の太さは，自由記述内の文において語と語が共起する割合を示すJaccard係数の強さによって異なっている (Jaccard係数の目安はFigure 2～4のCoefficientの凡例を参照のこと)。





### (2) 熟練保育者の共起ネットワーク (Figure 3)

熟練保育者による語同士の共起ネットワークは、計6つのサブグループに分類された。第1に、「園」「大切」「見直し」「少人数」「丁寧」などの語の関連がみられるサブグループである(熟練①)。第2に、「集まる」「楽しい」「時間」「運動会」「友達」などの語の関連がみられるサブグループである(熟練②)。第3に、「自分」「大人」「同士」「遊び」「食べる」「難しい」「言葉」などの語の関連がみられるサブグループである(熟練③)。第4に、「行事」「保護」「機会」「中止」「参加」などの語の関連がみられるサブグループである(熟練④)。第5に、「保育」「子ども」「マスク」「表情」「感染」のサブグループである(熟練⑤)。第6に、「職員」「大変」のサブグループである(熟練⑥)。以上のサブグループにみられる語の特徴から、熟練保育者は若手・中堅保育者と比較して、「食事」といった具体的な事象と同時に、「園」の「大切」なことについての「見直し」や、「言葉」への言及、また「行事」と「保護」者を結びつけるといった特徴がみられた。すなわち、熟練保育者は今・ここで子どもたちと過ごす視点と、保育を時間的・空間的に俯瞰して捉える視点の両方を有しつつ1年間の実践を進めてきたこと、またその視点もたらす、若手・中堅保育者とは質の異なる葛藤が自由記述内容に反映されていることが推察される。

### (3) 管理職の共起ネットワーク (Figure 4)

管理職による語同士の共起ネットワークは、計8つのサブグループに分類された。第1に、「例年」「見る」のサブグループである(管理職①)。第2に、「職員」「自分」「過ごす」「消毒」「生活」「不安」などの語の関連がみられるサブグループである(管理職②)。第3に、「現場」「理解」「日々」「工夫」「状況」のサブグループである(管理職③)。第4に、「活動」「機会」「制限」のサブグループである(管理職④)。第5に、「感染」「対応」「対策」「多い」のサブグループである(管理職⑤)。第6に、「保育」「子ども」「新型」「コロナ」「マスク」「園」「難しい」のサブグループである(管理職⑥)。第7に、「園児」「保護」「行事」「良い」「様々」のサブグループである(管理職⑦)。第8に、「教育」「環境」「大人」「経験」「変わる」のサブグループである(管理職⑧)。以上のサブグループにみられる語の特徴から、管理職は若手・中堅および熟練保育者と比較して、「子ども」だけでなく「職員」や「保護」者といった保育に関係する多くの大人に目を配りつつ、協力体制を築きながら保育を運営・実施してきた経験や葛藤が、自由記述内容に反映されていることが推察される。

## 3. 自由記述内容の分析

ここでは、共起ネットワークのサブグループを参照しながら、若手・中堅、熟練者、管理職それぞれについて自由記述内容の意味的なまとまりの整理を試みた。

若手・中堅では、頻度の高い語である「子ども」「保育」「感染」「マスク」を含む②および⑧を合わせて、具体的な日々の保育に関する内容が主眼となるまとまり(〈日々の保育〉)、次に「行事」を中核とする①のまとまり(〈行事への対応〉)、最後に④⑤⑥をCOVID-19により生じた変化への気づきや経験の意味づけに関わるまとまり(〈気づきと意味づけ〉)という3つで整理した。

熟練者では、頻度の高い語である「子ども」「保育」「マスク」を含む⑤および②③を合わせて、具体的な日々の保育に関する内容に加えて子どもの発達などへの将来的な不安への視点を

持ったまとまり（〈日々の保育と発達への見直し〉）、次に「行事」「保護（者）」を中核とした④と①を合わせて、保育や行事の見直しおよび保護者との関係に関するまとまり（〈保育・行事の見直しと保護者〉）、という2つで整理した。

管理職は、本調査における回答者の約7割を占め、一人一人の記述量も若手・中堅や熟練者よりも多い傾向にあった。そのため、ふり返りの視点も多岐にわたり、少数の意味的なまとまりとして整理するは本来適切ではないかもしれない。しかし、若手・中堅および熟練者との比較において、管理職の視点の特徴を知ることの意義に鑑み、以下の4つのまとまりで整理した。すなわち、「保育」「子ども」「園」「感染」「コロナ」といった語を中心とするまとまり（〈園としての感染対策と保育〉）、「行事」と「保護（者）」を中心とするまとまり（〈行事と保護者〉）、「職員」を中心とするまとまり（〈職員への視点〉）、「工夫」「変わる」などの語を含むまとまり（〈保育の工夫と見直し〉）である。なお、管理職のデータは量が多いため、KJ法の要領により4つのまとまりの下にいくつかの下位カテゴリを分類した。

以下では、それぞれの役職の意味的なまとまりごとに、典型的な自由記述を引用しながら考察していく。なお、引用する自由記述については、原則として記入内容をそのまま表記しているが、特定情報となるおそれのある内容がある場合は、文意を損なわないように配慮しつつ、一部修正を行っているものもある。

### (1) 若手・中堅保育者

#### 〈日々の保育〉

##### 食事場面の難しさ

現場の最先端で子どもと関わるのが若手・中堅保育者であろう。彼女ら彼らにとって、COVID-19のパンデミックは保育において暗黙の日常ともいえる数々の場면을困難にした。施設種別を問わず、乳幼児保育において食べること・飲むことは避けがたい場面であり、かつ、保育時間中最も感染症対策への配慮を必要とする場面でもある。記述1と2がその典型的な回答例である。

【記述1】私立認定こども園，女性，経験5年，担任，3歳以上児

「何事にも密を避けるために距離を取らなくてはいけなくなったことが難しかったです。例えば、子ども同士の対面での食事が不可能になりました。そのためクラスで一斉に食事する事も難しくなり、時間差で食べるということを始めました。時差で食べることで保育者と連携は取るもののクラスの子ども全員がどのくらいの量を食べたのかなど担任が把握することが難しかったです」

【記述2】私立認可保育所，女性，経験5年，担任，1・2歳児

「一時期子どもたちと一緒に食事ができないことがありました。そのことで一緒においしく食べるということのなかで楽しい雰囲気や、食べてみようと思えるきっかけづくりに大きく影響しているんだなあと思いました。同時に、できない状況のなかでの楽しい雰囲気づくりや食べてみたくなるような関わりを試行錯誤するなかで、どちらにしても、一緒に食べるか食べないかではなく、どう気持ちを向けるか、が大切なかなとも感じました」

食の場面は、健康・栄養から社会性、仲間関係や集団づくりの基盤となる重要な位置づけを

持っている。しかしながら、政府の感染予防対策が飲食店の規制を重視しているように、食は現場保育者が最も気を遣い、子どもおよび保育者の行動制限を行わなければならない場面となったことが分かる。

### マスク保育

保育中の何気ないやりとりを困難にする要因となったものが「マスク」である。子どものマスク使用については、比較的早い段階で日本小児科医学会<sup>10</sup>や世界保健機関（WHO）<sup>11</sup>などが指針を出し、5歳以下は適切な使用ができないばかりか、2歳未満は窒息等のリスクが大きいことなどが示された。これにより、多くの保育現場では子どものマスク使用については一定の基準が見え、特に3歳未満児については使用しないと判断した現場も多いのではないかと想像される。しかし、職員については、原則的に常にマスク着用を強いられる状況であり、そこから様々な困難や課題が生じたと考えられる。

【記述3】私立認可保育所、男性、経験5年、担任、3歳以上児

「保育中に常にマスクをした状態で声を出す辛さもありました。声がこもるため、いつもより声を張らなければいけない体力的な辛さもありました」

【記述4】公立保育所、女性、経験10年、担任、3歳以上児

「マスクでの保育は想像以上に苦しく、絵本や紙芝居の読み聞かせは声が枯れそうでした。歌を歌い楽しんでいる時も、子どもたちは歌詞があいまいでした。歌詞は掲示してあったが、字の読めない子は保育者の口元をみて覚えていたところもあるのかと気づくことができました。マスクをしていることで保育者の表情が伝わらず、笑顔を向けているつもりが、子どもはじっと無表情でこちらを向いていたことがあり、表情が見えるのは大事だなと感じました。乳児は特に大事であると感じました」

【記述5】私立認可保育所、女性、経験6年、担任、1・2歳児

「保育士はマスクをしていることで、特に0歳児や1歳児の子どもたちに表情を読み取ってもらいづらいと感じました」

記述3～5のように、保育者のマスク着用の弊害は、保育者自身の健康被害とともに、社会・言語的発達期にある乳幼児にとって表情認知を難しくするのではないかと、聴覚的に知覚する音声と視覚的に知覚する口唇部の運動・形態との認知的統合を阻害するのではないかと懸念が生じていることが分かる。後者の影響については、乳幼児発達の多くの専門家がメディア等で懸念を表明しているものの、発達科学的な実証知見として確認されているとは言えない。家

---

<sup>10</sup> 日本小児科医学会は、2020年5月25日に「2歳未満の子どもにマスクは不要、もしくは危険！」という啓発ポスターを公開した。

([https://www.jpa-web.org/dcms\\_media/other/2saimiman\\_qanda20200609.pdf](https://www.jpa-web.org/dcms_media/other/2saimiman_qanda20200609.pdf) 2022年3月23日閲覧)

<sup>11</sup> WHOは、2020年8月21日に“Advice on the use of masks for children in the community in the context of COVID-19”を発売し、日本WHO協会は同年8月25日にその日本語訳を公式ホームページ上で公開した。

(<https://japan-who.or.jp/news-releases/2008-10/> 2022年3月23日閲覧確認)

庭での状況(親子でマスクをせずにどのくらい対面コミュニケーションが保障されているか等)を確認できればまだしも、後に確認するようにCOVID-19感染拡大下における保育現場の主要な困難の一つは保護者とのコミュニケーション不足であるため、不安がぬぐい切れない状況で保育に当たってきたことが想像される。

子どもへのマスク着用については、3歳以上になると、自治体の方針や保護者の要望により着用する現場も少なくなかったであろう。これに伴う保育者の実感・認識としては記述6がその例である。

**【記述6】公立保育所，女性，経験5年，フリー・加配，3歳以上児**

「幼児クラスでは、子どもたちは食事・午睡と外遊び以外はマスク着用で過ごしています。マスクを各自ビニール袋に入れて管理することにも今ではすっかり慣れている子が多く、子どもたちの適応力には驚かされます。しかし、3歳児クラスで支援児についていますが、彼らの場合はなかなか理解が難しいようです。感覚過敏もあるためか、常にマスクは顎まで下げています。何度マスクの役割を伝えてもその時だけ戻すことは有りますが、次の瞬間にはマスクを下げていて、くしゃみや咳もそのまましているし食事中も大きな声を出し続けています。外したマスクを無造作に床に投げることもあります。衛生・清潔の意識もなかなか実感として入らないようです。このような状況下でなければ不要なはずのマスクなので、かわいそうだなと思いつつも、お互い感染のリスクは避けたいのでジレンマを感じながら日々保育しています」

子どものマスクは、年齢・発達のみならず、感覚過敏などの特性を持つ子どもにとっては困難が大きいのはもちろん、着用による不快感や呼吸のしやすさなどの個人差も大きいと考えられる。折しもインクルーシブ保育の流れが広がってきた中で、合理的配慮を考えなければならぬところ、目に見えないウイルスの問題は、個人の人権尊重と感染リスクとの間で終わりになきジレンマを生じてきたといえる。

**保護者とのコミュニケーション不足**

若手・中堅保育者においては、熟練者や管理職に対して相対的に「保護者」への言及が少ないという特徴があった。しかし、記述7や8のように、保育を進める上で保護者とのコミュニケーション不足が負の影響をもつというふり返りも見られた。

**【記述7】公立保育所，女性，経験10年，担任，3歳以上児**

「保護者が玄関対応になったことで、迎える時に他愛ない話ができなくなり距離を感じました。普段の何気ないやりとりが保育園への興味や理解に繋がっていたことに気づくことができました」

**【記述8】私立認可保育所，男性，経験5年，担任，3歳以上児**

「園内に保護者を入れないため、コミュニケーションが疎になり、家庭との連携や保護者支援などの機会が圧倒的に少なくなり、保育にもやや支障がありました」

**子どもの姿**

そして、このような日々の保育の困難さを1年間経験してもなお、子どもの柔軟さやすばら

しさにについて振り返る保育者もいた（記述9）。

**【記述9】** 私立認可保育所，男性，経験13年，担任，異年齢（3歳以上児のみ）

「振り返って気づくのは、どれも今の自然な姿だということです。常識という枠にはないことが、これからは起こり続けるであろうと最近を感じるようになりました。子どもたちの遊びにも、注意喚起をする放送を真似する姿、赤ちゃんの検温をする姿、おもちゃ箱の蓋とトングを組み合わせて消毒する機械を作る姿がありました。今でもお店を開いた時に消毒と検温はセットです。たまに消毒し忘れるとまあいっかというように話しています。子どもは大人より柔軟で、自分で言葉にしたり、遊びの中で体験を自分に取り入れたり、今と向き合っているように感じます。そしてそれはネガティブではなく、受け止めることによって新しい行動を生んでいるということを学んでいます」

### 〈行事への対応〉

先行する他の調査（東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター，2022等）でも明らかになっているように、COVID-19の感染拡大が保育現場にもたらした影響の内、行事をめぐる問題は其主要なものとなっている。記述10や11がその例である。

**【記述10】** 私立認定こども園，女性，経験5年，担任，3歳以上児

「コロナのこともあり行事や普通の保育を見直す機会が何度もありました。そのときにコロナだからできないではなくコロナだからこそできることも沢山ありました。そのため、これから先まだ続くであろうこの状況で、保育者が子どもたちにできることをしてあげたいと思います」

**【記述11】** 私立認可保育所，女性，経験6年，担任，3歳以上児

「コロナ禍で行事がいつも通り計画することができない状況だったため、行事のねらいや意図を考え直すきっかけとなりました。しない方向ではなく、するためにどうしたらよいかを考える1年だったと感じます。保護者からも、安全面に配慮して実施してくれたことを感謝する声が多く聞かれました」

川田（2020）は、COVID-19感染拡大の1年目において、日本の小学校教諭がTVニュースで「行事は授業より大切」であると述べていた事実の重要性を指摘している。日本の保育・教育現場ほど、年間予定に占める行事の種類と数が多い例が他国にあるだろうか。系統的な比較研究は行われていないと思われるが、行事は日本の公教育の重要な特徴であり、教育活動の成功や秩序維持と密接につながっていると考えられる。行事は、保育・教育活動の節であり、骨格とも言える機能を担っている。それゆえに、通常時において「行事を見直す」には、想像以上のエネルギーを必要とするだろう。しかし、行事をめぐる保育者の振り返りでは、悲観的な内容よりも「見直す」「考え直す」きっかけになった状況をむしろポジティブにとらえ返している記述の多いことが目を引く。COVID-19は、日本の行事文化にとって、ある種の“黒船”の役割を果たしているのかもしれない。ただし、以下のような迷いや悩みもまた、振り返りとして述べられたことを軽視してはならないだろう（記述12, 13）。

**【記述12】** 私立認可保育所，女性，経験2年，フリー・加配，0歳児

「新型コロナ禍のため、行事は全クラスそろって行うことができず、特に乳児ということで部屋で単独

で行うことが多かったです。今年の乳児は月齢の高い子どもが多く、踊ることが好きな子どもたちでしたが、発表会が年中児及び年長児さんのみだったため、直接保護者に観ていただくことができず、残念でした。それ以外は、撮影を行いDVDにして保護者に渡しました。今年度は観ていただけたら良いと思っています。新型コロナで、先が見通せないということもあり、行事なども今まで通りの行事を状況をみながら行うことで良いのか、何か新しい行事も考えた方が良いのかと思うこともあります」

【記述13】 国立幼稚園，女性，経験6年，フリー

「伝統的に積み重ねられてきた行事などの形態を改めて見直す機会になり、子どもにとって良い変化となった部分もあったかもしれません。反面、遠足や食育など保育の中で制限されることも多くあり、子どもにとってどれほど豊かな経験を保障できたのだろうかと常に頭をよぎります」

### 〈気づきと意味づけ〉

パンデミック下の保育のふり返りでは、行事に限らず、現場保育者に様々な気づきを与えたり、むしろこうした状況ゆえに得られた経験について積極的に意味づけようとする記述も多く見られた。

【記述14】 私立認可保育所，女性，経験1年，担任，0歳児

「1年目であったため、行事が中止された分、丁寧に先輩方が業務等を教えてくれました。コロナで大変でしたが、1年目としては良い意味で特別な1年だったと思います」

【記述15】 公立保育所，女性，経験10年，担任，1・2歳児

「新型コロナウイルス感染拡大防止を受けて、臨時休園を経験しました。保育園が再開しても、育休を延長して定数の8割程度の登園の時は、子どもも落ち着いて過ごしていました。毎年、新年度の1歳児は、部屋中に泣き声が響き渡るのですが、それもあまりありませんでした。次々に子どもを受け入れするという状況ではなかったからなのかな、と思います。定員全員（16名）がそろようになると、今までは見られなかった噛みつきが起こるようになりました。感染防止でなるべく少人数（2、3人）で過ごしていた状況から、いきなり8名程度で過ごすことが増えていったことも影響しているかもしれません。食事の準備前など、どうしてもそんな状況にならざるを得ない時間があるのです。また、お昼寝のスペースも、今までの場所では全員が寝ることができないため、寝る場所を増やした経緯があります。狭い空間に子どもが多くいることを、感じさせられました。今回のことから、職員配置基準・子ども一人に与えられる面積基準の改善を求めたいです」

【記述16】 公立保育所，女性，経験15年，担任，1・2歳児

「年度始めは緊急事態宣言により、希望する方だけの保育になりました。そのため、例年より子どもが少なく、ゆったりとした雰囲気の中で保育ができ関係づくりもしやすかったと思います」

記述14は、1年目の保育者自身にとって、行事の中止により生まれた時間をもつポジティブな側面のふり返りである。記述15と16は、はじめての緊急事態宣言により家庭の協力を得て、例年よりも少ない子ども数で年度初めの保育を行ったことによる気づきである。そこから、3歳未満児における噛みつきなどの保育上の悩みが、かねてより指摘されている配置基準や面積

基準による制度的問題であることを準実験的に証明する結果となったことが分かる。一方で、自分たちの保育のあり方そのものを見つめ直す契機になったことを繰り返る保育者もいる（記述17）。

【記述17】公立幼稚園，女性，経験12年，担任，3歳以上児

「家庭でできること（個人的な製作や視聴覚教材を見る，タブレット端末などを通じた擬似的な体験，公園で体を動かすなど）と，園でしかできないこと（同世代の友達と協働しながら，主体的・対話的で深い学びをすること，自然物との触れ合い，体験的な活動をすることなど）を，意識して，少ない教育時間の中で，子どもたちの発達に必要な経験を厳選して教育活動を行った。感染症対策のため従来通りにできないことが増えましたが，様々な別の方法を考える1年でした。保育は到達点は同じでもそこに到達する方法が何通りもあるので，今できることを目の前の子どもたちの実態と照らし合わせて，思考するように教員側も変化しました。伝統的に引き継がれてきたことも，本当に子どもの育ちに相応しい指導だったのか，振り返る機会となり，不必要なことを取捨選択するきっかけとなりました」

記述17の「保育は到達点は同じでもそこに到達する方法が何通りもある」という指摘は，パンデミック下の制限に対して発想の切り替えが求められたことを意味するが，実は幼稚園教育要領や保育所保育指針等に明記される「環境を通して行う」とされる保育の方法原理そのものとも言える。一方で，回答の中には，「コロナを理由に，考えることや子どもの成長のためのことをさぼっていたことが多かったように感じます」（私立認定こども園，女性，経験12年，フリー，3歳以上児）という冷静な現状分析もある。未知の状況への対応過程で，本質的な原理を確認するに至る保育者や保育現場もあれば，状況を口実に低きに流れる例も決して少なくないことだろう。加えて，園長・施設長などのリーダーシップや自治体／行政の判断のスピードや的確性もまた，日常が壊れていく最中において最も重要なものであると気づいたことを示す若手・中堅の記述も散見された。

## （2）熟練保育者

〈日々の保育と発達への見通し〉

### 保育上の具体的課題

熟練保育者のふり返りは，若手・中堅と共通して，日々の保育上の難しさに関するものも多いが，その記述内容がより具体的であったり，子どもの発達上の懸念をより強く反映したものが多いと考えられた。記述18～21はその例である。

【記述18】私立認可保育所，女性，経験39年，フリー・加配，3歳以上児

「子どもと一緒に食事が食べられないことで，どうしても言葉かけが多くなってしまい楽しい雰囲気を作れない気がする。また，交代でクラスから抜けて食事を取るためトータルで子どもの様子が把握できない。大人がそばで一緒に食べることの大切さを感じている。大人が常時マスクをしていることで，大人の表情でのメッセージが伝わりにくい。ままごと遊びでも食べるマネをする時にマスクをはずすべきなのか？マスクのまま食べるマネをするのも変な気がするし……。大人のマスクを取って逃げるのが遊びになってしまった時があり，マスクをしていない大人を見ると子どもたちは大笑いをす

る。やらせてはいけないと思いつつ、こんなことで厳しく叱るのもどうなのか、と悩んでしまった」

【記述19】国立幼稚園，女性，経験20年，担任，3歳以上児

「制限がとても多く、子どもの発達にとって、心配なことがたくさんあります。例えば、人との距離をあけること。幼稚園の3歳児は、初めての集団生活の中で、「友達」という存在に初めて出会い、「大好き」でくっつきたくなるのに、私は「離れて」と言わなくてはならない。例えば、例年、大切にしてきた「触れ合い遊び」。「あーぶくたった」などのわらべうた。「手をつないで丸くなりましょう」なんて、とても言えない。しかも、歌を歌いながらなんて。「人には近づいてはいけない」「人との距離をとらなければいけない」ということが、子どもの発達にとってマイナスになってしまうのではないかと心配です。歌を歌えないことも心配です。歌うと楽しいし、元気になれることがあるのに、それできないのは残念でした」

【記述20】私立認定こども園，女性，経験18年，担任，3歳以上児

「以上児クラスはコミュニケーションの経験がある分、マスクをした生活になってもそんなに困りはなかったように思います。それに比べて、未満児クラスは言葉の獲得や理解、表情から感情を読み取るなどのコミュニケーションが育ちにくいのではと推察します。どのように子どもと向き合うべきなのかを模索しながら接しているところです。子どもの命を守ることを第一として、今私たちにできる子どもたちへの発達の保障を考えていきたいです」

【記述21】私立認定こども園，女性，経験24年，担任，1・2歳児

「言葉のやり取りが上手いかず子どもたちには、分かりづらかったと思います。ままごと遊び内での食べるマネなど、マスクをしたままでの遊びになるため、思いきり楽しむことができませんでした」

一方で、保育者のマスク着用やソーシャル・ディスタンスの影響について、熟練者がより発達的な見通しを考えながら保育に当たってきたことは、記述22や23のように発達への影響は比較的小さいのではないかというふり返りにも表れている。

【記述22】私立認定こども園，女性，経験22年，担任，1・2歳児

「未満児も手洗いを頑張り、感染予防に努めました。食事では、仕切りも危険なため置くことができませんでした。完璧にはできないなと感じます。マスクの保育は大分慣れました。言語発達の問題はあまり感じませんでした」

【記述23】私立認定こども園，女性，経験20年，パート，1・2歳児

「私はコロナのためのマスクが子どもとの距離を遮ると思っていました。しかし、侮るなかれ、子どもの察知する能力、こちらの意図をマスクした顔であってもより集中しているのかどうかはわかりませんが、すべて読みとっているかの様。口元は見えていないはずなのに口元まで同じ表情をします」

## 休園の影響

COVID-19パンデミックの1年目は、2020年2月末に北海道が先行して緊急事態宣言を発出し、その後宣言は全国に広がった。内閣総理大臣の要請を受け、2月28日付で文部科学省から

「新型コロナウイルス感染症対策のための小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における一斉臨時休業について」（事務次官通知）が発出されたことにより、学校は戦後初めてとなる全国一斉休校の措置を取った。幼稚園については、同日に「新型コロナウイルス感染症対策のための学校の臨時休業に関連しての幼稚園の対応について」（幼児教育課事務連絡）が出され、全国一斉休業の要請の対象外であるとされたものの、前述のように同年4月22日時点で国公私立の7割～9割が休園したというのが実態であった。これはパンデミック2年目以降と大きく異なる点である。長期にわたる休園は、同じ幼児を預かる保育所と幼稚園の法律上の位置づけの違いとともに、現実における社会的役割の差をつきつけるものであった。結果として、数か月におよんだ休園が、幼児にどのような影響を与えたのか、以下のふり返りに垣間見ることができる（記述24、25）。

【記述24】私立幼稚園，女性，経験27年，担任，3歳以上児

「20年2月からの休園により、家庭内だけの閉鎖した中で過ごした4ヶ月がありました。身についていた生活習慣を忘れて、取り戻すことに新学期は必死でした」

【記述25】国立幼稚園，女性，経験30年，担任，3歳以上児

「私のクラスには、2名の子どもが保護者の方の意向でコロナウイルスの感染拡大予防として休園をしていました。1学期中、7月まで欠席をしていたA君は、とてもおしゃべりで体を動かすことが大好きな子どもでしたが、久しぶりに登園した時には無口で、周りの様子をうかがう子になっていました。年中時までの友達と体を動かし始めましたが、動きについていけず、すっかり自信を無くしてしまう様子に、自粛生活の影響の大きさを痛感しました。B君は運動会を機に登園し始めましたが、これまで自分が居なかった園での周りの友達の変化やそこについていけない自分を感じて、必死で立て直そうとしている姿に心が痛みました。もちろん、担任としても友達の姿や園でブームになっていることを伝え続けてはきましたが、B君にとっては自分自身で感じ取れなかった時間を自分自身で取り戻そうともがいていたように感じます。2月末からコンスタントに登園するようになり、彼の表情もやっとなんか柔らかくなってきたようにとらえています」

## 〈保育・行事の見直しと保護者〉

### 行事の見直し

若手・中堅も積極的にふり返っていた保育や行事の見直しは、熟練者においても共通している。普段は例年通りこなすことで精一杯であったが、何がより重要なのかを精査し優先順位を考える思考法が促された様子がうかがえる。また、記述26にみられるように、いやおうなく分散登園や少人数保育が行われたことにより、平常時に戻った際にも検討すべき事項として記憶されたことは、若手・中堅の記述14～17とも共通している。

【記述26】国立幼稚園，女性，経験22年，担任，3歳以上児

「この一年を振り返ってみると、子どもたちにとっては、日常の遊や生活が保障されることが何より大切であって、それらをじっくりと丁寧に味わい、向き合えたことが貴重な経験になったと改めて感じています。また、分散登園や少人数保育というスタイルは、定員や教育日数の問題等で幼稚園ではなかなか実現できないことでしたが、今年はそうせざるを得ない状況の中で、新入園児や進級時の保育を、

少人数で丁寧に始めることができました。保育における接続期、特に環境が変化する時期にこうした丁寧な関わりを持てたことは、今後の保育の援助の在り方にも生かしていきたいと思いました」

【記述27】私立認可保育所，女性，経験22年，担任，0歳児

「運動会、発表会は分散して開催したことで、こういうやり方も良いかもしれないと思ったり、今までは当然として行っていたことが、やむを得ず変えた結果、良かったということもあり、見直すきっかけになったと思います」

【記述28】国立幼稚園，女性，経験20年，担任，3歳以上児

「今年度、行事の見直しをたくさん行いました。感染症対策を行いながら、どのように実施できるか。多くの園でも実践されたと思いますが、運動会や発表会は学年ごとの実施。行事を通して何をねらうのかを再度話し合い、大切にしたいことは何か、短い時間の中でどんなプログラムにするのかなどを考えました。発表会では、歌は歌えないけど、CDに合わせて合奏をする。卒園式でも歌は歌えないけど、CDに合わせて手話をする、などの案がでました。全園児が集まる行事は難しかったです。2月末には、テラスや園庭を使って、広い場所で全園児が集まり、年長児とのお別れ会を行いました。行事の見直しは毎年行っていたつもりでしたが、今年度は制限があるからこそ、大切にしたいことがはっきりと見えてきたことは成果であったと思います」

## 保護者への視点

一方で、特に行事の中止や開催方法の変更が与えた「保護者」への影響について、熟練者は若手・中堅よりもより深刻にとらえている様子がうかがわれた（記述29～31）。こうした傾向の背景にはいくつかの理由が考えられる。まず熟練者は若手・中堅よりも主たる担任やリーダーであることが多いため、保育をより広い視野でとらえる構えがあるだろう。加えて、自身が保護者としての立場を経験している保育者も多いかもしれない。それにより、保育を保護者の立場から考えやすい可能性もある。パンデミック下の保育1年目に、保育や行事の見直しが可能となったことのメリットをふり返るとともに、保護者の意見をどう汲み取り、意思疎通や関係性をより円滑なものにしていくかが、2年目の課題として記憶されたものと思われる。同時に、こうした危機状況において、普段からの保護者との信頼関係やコミュニケーション機会の確保が大きくものを言うことを認識した保育者も多くいたのではないかと推察される。

【記述29】私立認可保育所，女性，経験22年，担任，0歳児

「予測不可能なことが多く、先の予定がなかなか立たないことや、今まで通りにいかない事が多い1年でした。特に行事では、親子遠足、状況を見て行えた月もありましたがクラス懇談会、父母会行事は開催中止となりました。親子で楽しめる、子どもたちが楽しみにしていることが行えず残念に思いました。（…中略…）また、クラス懇談会や父母会行事が行えなかったことで、保護者同士が話す機会が少なかったり、保育士と保護者間での話ももう少しできたらよかったなど、保護者からの意見も出ていました」

【記述30】私立認可保育所，女性，経験39年，フリー・加配，3歳以上児

「大きな行事（保護者が参加するもの）が中止や縮小になった。運動会などは「保護者に見せる」とい

う保育士の気負いがなかったので、子どもたちが伸び伸びと楽しそうに取り組んでいた。今後の取り組み方を考える機会になった。懇談会ができなかったりことで、保護者との信頼関係を作ったり、保護者同士の関係をつなげていったらすることが難しかった」

【記述31】 国立幼稚園，女性，経験22年，担任，3歳以上児

「行事や活動等も同様で、保育の計画を実行するものとして考えるのではなく、やるかどうかから考えられたことは、保育全体の計画の見直しにもつながりました。そうしていく中で、何が大切で欠かせないことなのかを、より考える機会をもつことができました。しかし、保護者にとっては、貴重な保育参加の機会が減ってしまったことはとても寂しく感じたようで、特に、新入園児の保護者にとっては、園のことを知る機会が奪われてしまったということで影響が大きかったようでした。また、在園の保護者の方々の感じ方も様々で、園側がオンラインやオンデマンド、また文書等を工夫して発信しても、それが上手く伝わらなかったり、分かりにくかったりということも多く、やはり対面でコミュニケーションを積み重ねることの大切さに改めて気づきました。こうした中で見出した、保育の中で大切にしたいことを園内で共有し、保護者や地域とも共有していけるよう、今後も努力していきたいと思っています」

なお、熟練者の記述の中には、「ICTを導入したことで保護者との連携をスムーズに行う」ことができたという経験や、「保護者が参加しない方がやりやすい行事」もあることが分かったというふり返りもあった。加えて、「準備が大変な行事が簡略化、もしくは無くなったことを単純にラッキー！的感覚でしか捉えていない保育者が多い」ということを反省的・批判的に指摘する例があったことも、熟練保育者のふり返りの特徴かもしれない。

### (3) 管理職

#### 〈園としての感染対策と保育〉

日々の感染対策と子どもの経験・発達とのバランスを取るための保育の実際と難しさについては、若手・中堅や熟練者において具体的にふり返られていた。ここでは、管理職として、園全体の方針や状況の見極めに関する葛藤や課題意識についてのふり返りに絞ってみたい。

#### 不安と緊張感

若手・中堅および熟練保育者のふり返りからは、現場の先端で起こる課題に日々向き合い葛藤する様子や、その中でも前向きな面をさぐろうとしていることがうかがわれた。こうした現場保育者へのストレスも大きいに違いないが、園経営の全体を統括する管理職にとっては、適切な対応の見えないパンデミック1年目の不安と緊張は一層強く深いものがあったと考えられる。記述32～34がその例である。

【記述32】 私立認定こども園，女性，経験13年，主任保育士

「年度の初めは、自分が関わるのが目の前の子どもの命を奪うことになるかもしれない恐怖と不安でかなりの緊張感の日々だった。距離を取りながら、身を寄せ合うように気持ちを寄せ合いながら生き延びることができ、幸運だったと思う。自園では、幼保連携型認定こども園の機能を活かし、1号2・3号にかかわらず、また学校が休みになった小学生の学童保育や地域の未就園親子の電話育児相談な

ども含め、保育が必要な方たちの役に立つことができたと考えている。子どもたちはこの状況も受け止めながら懸命に日々を生きている感じで、ストレスとも共存しながら笑ったり遊んだり、例年と変わらないような様子で園生活を送っているようだった。そして、その姿は大人たちをケアしたと思う。オンライン、電話、郵便とあらゆる手段を使いながら園児やご家庭とつながろうとした。みんながどうかしてつながりたいと思っていた日々をふりかえって、ひとは関わり合わないと生きていけないのかもしれない、と思ったりしている」

【記述33】 公立保育所，女性，経験37年，園長・所長・施設長

「毎日の緊張感が高かったことが一番です。感染予防のためにどんなことが有効か、何をしたらよいのか、試行錯誤しながら保育を進めてきました。新年度がスタートしてしばらくの間は消毒液等の衛生用品がぎりぎりの状態で、市からの提供も品薄だったので、どう乗り切るかを相談しながらの毎日でした。感染防止のためにこうするとよいということは提示されたが、それに必要な備品などは購入してくれるわけではなく、各園の工夫に任されていたことに怒りながら担当者に掛け合ったこともありました」

【記述34】 私立認定こども園，女性，経験18年，主任保育士（3歳児以上児担当）

「新型コロナが出始めた頃は、子どもを預かることが不安に感じました。毎日、私たち保育者が感染したらどうしようという不安の中での保育が続きました。園として、玩具や部屋の消毒、手指消毒や透明パネルの設置、検温など徹底しましたが、まだ理解力が乏しい年齢の子にとっては、友達との接触、飛沫感染について気を付けて生活することは難しいです。子どもを抱っこしたり、スキンシップを大切にしている職業です。毎日が不安の中で、手洗い・うがいを促し、掲示物や声掛けし、消毒も徹底しました。しかし、私たちがどれだけ気を付けていても、各ご家庭では旅行に出かけたり、お父様が出張へ行ったりしていることを考えると子どもを安全にお預かりすることへの負担が大きかったです。その中で子どもたちの充実した1年を過ごすことができるよう、園内で様々な活動を設けたり、お泊まり保育は日帰りにしたりなどできる範囲で楽しい1年となるよう工夫をしました。少しずつ子どもたちにも、コロナについての知識が付き、ソーシャルディスタンスや手洗いうがい理解できるようになってきました。コロナというものに対し、子どもがストレスにならないよう、気を付けることが必要でした。ごっこ遊びの中で、ソーシャルディスタンスのテープを引く子や、透明パネルをお店屋さんごっこで作るなどの姿が見られ、影響の強さを感じました。それが、子どもにとって良いことなのか悪いことなのか分からないです。メディアでは、医療従事者のことばかり取り上げられていますが、保育の現場も大変な思いをしていることに、国が気が付いてほしいです」

記述33にあるとおり、パンデミック1年目の特徴として挙げられるのが当初の物質レベルの不十分さである。マスクや消毒ばかりでなく、消毒の際に用いる紙用品なども瞬く間に品薄となった。加えて、マスクの効果がどこまであるのかについても様々な見解がメディアを飛び交い、専門家によっても意見が食い違うことがしばしばであった。マスクの素材、消毒の成分、空気清浄機の効能、換気に必要な時間、そして飛沫感染防止のための対人距離など、ある程度の見解が整理されるまでには数か月かそれ以上を要したといえる。

また、記述34で述べられているように、医療従事者への社会的・経済的支援は、(医療従事者差別の問題も孕みながら)一定の国際的・国民的コンセンサスが得られていったのに対して、

同じように“エッセンシャルワーカー”にくくられた保育者に対しては、必ずしもそのような社会的評価が定着したとは言い難い。別の管理職の回答には、「保育士も含め、ケアに関わる仕事の多くがエッセンシャルワーカーであるともてはやされたが、特に処遇が改善される兆しも見られず、体よく使われている感じがしています。社会的意義と実際の処遇との開きに、疑問を感じる人が多い一年だった」（私立認可保育所、男性、経験20年、園長・所長・施設長）という批判的なふり返りも見られたが、これに首肯する保育関係者は少なくないだろう。

### 決断を迫られること

リーダーシップが問われる管理職に対して、若手・中堅からその判断力や判断のスピードに対する厳しい意見もあった。とはいえ、ほとんど誰も経験したことのないパンデミックで、情報が錯綜する中、素早い判断をすることは容易ではない。多くの管理職にとって、親子や職員の命と健康に関わる決断をいつどのようにするか、悩まぬ日の無い1年であったと想像される（記述35～37）。

#### 【記述35】私立幼稚園，女性，経験20年，園長・所長・施設長

「誰かの指示ではなく、どこかの真似ではなく、自園にとってのベストな運営方法を決断することが求められました。しかも、かなりのスピードで決断して、行動に移す必要がありました」

#### 【記述36】私立認定こども園，男性，経験20年，園長・所長・施設長

「解熱後24時間と働く保護者に伝えにくいところはありませんでしたが、心を鬼にして伝えてきました」

#### 【記述37】公立保育所，女性，経験25年，園長・所長・施設長

「とにかく今は何を大事にするべきかを考えて、考えて過ごした日々でした。園長としては日々何が起きて、誠心誠意そのことに向き合う覚悟を持つしかないと思えた一年です」

### 施設種による違いや基準の曖昧さ

熟練保育者のふり返りに触れて前述したとおり、パンデミックという危機状況になって、保育所と幼稚園の法律上および社会的位置づけの違いが表面化した。最初の緊急事態宣言で、保育所は行政から保護者や職場に家庭保育への協力依頼が出されるかたちであったが、多くの幼稚園では他の学校と同じように「休園」という措置が取られた。記述38には、幼稚園からの苦言が呈されている。認定こども園は、多様な対応が取られたと推察される。元々幼稚園であったか保育所であったかや、地域の実情などから、それぞれの地域・自治体や現場レベルで判断されたのではないだろうか。記述39には、まさに認定こども園が折衷的な行政管轄になっていることの混乱ぶりが語られている。

#### 【記述38】私立幼稚園，男性，経験30年，園長・所長・施設長

「感染予防対策として何が正解なのか未だにわからないことが多く、保育所では全国組織から対策の指針が示されていたが、幼稚園では文科省からこのようなマニュアルが発表されましたとの通知があるばかりで、そのマニュアルも学校における対策が主なもので、幼稚園に特化したものが示されていないことが、国内における幼稚園の位置づけを示されたようで悲しい限りです」

**【記述39】私立認定こども園，男性，経験1年目，園長・所長・施設長**

「認定こども園の園長に就任して1年目ということで、これまでの園の保育・教育活動との比較を論じるのは難しいところもあるが、子どもを預かるうえで保育・幼児教育で一番大事なことと思われる心も体も受け入れてあげるというような対応を、どの程度加減したら良いのかについて大変迷いました。子どもの健康・安全はもちろんですが、保育者の健康・安全も配慮しなければなりません。しかし、新型コロナの感染については当初分からない部分が多く、接触感染の恐れは過剰に伝えられていました。また、学校においては、1年生でもマスク着用を課し、子ども同士の接触はおろか話さえも制限する状態がニュース等でも盛んに放映されていました。さらに、認定こども園であるため、文科省からは可能な限り休園や登園自粛をお願いされ、厚労省からは保育園部分として可能な限り保護者の就労のために園を開いてお子様を預かってほしい旨の一見相反する形の文書・通達が来ていました。こちらのことについて、国からの調整した統一見解はなく、県・市からも単純のその部署ごとの同じような方向での文書が流されました。独自で、ネットで情報を探り、知り合いの医師からの情報を得て園の方向性を決めて、日々の教育にあたってもらったり、行事の実施の可否から内容の検討まで園長として最終判断をしてきたことはかなり難しかったと思っています。保育者や保護者でも新型コロナに対する認識は様々あり、すべての方の安心安全となると、ほとんどの活動を取りやめるとか極端に縮小するようになってしまう。これで幼児教育ができるのでしょうか。結果として、当園では、どうしたらできるのかということすべての活動の基本の考えとすることで方向性を決めて、1年間運営してきました」

一方で、施設種別にかかわらず、乳幼児保育としてパンデミック下での保育・教育活動をどのように行っていくべきなのか、根拠に基づいた指針がほとんど無いという事実も露呈した。記述40と41は、現場に頼った判断の限界を訴えるものとなっている。

**【記述40】私立認定こども園，男性，経験18年目，園長・所長・施設長**

「園が教育・保育施設であるとともに、社会インフラであることも実感しました。しかし、感染症の影響下で教育現場がガイドラインを作成して感染症との共存を図ることを目指す中で、保育については、当事者である厚労省も学者の皆さんも医療の現場も、子どもの育ちや保育の現場について誰一人明確な指針を示して頂けず、模索するしかなかったです。乳児の発語への影響や、愛着形成に与える影響などについて、危険とトレードオフとなるにしても、どこまでやっていいものかがわからず、現場での判断に苦労しました。今後も感染症との共存を考えるうえで、子どもたちの育ちを保障しながらの教育・保育の環境構築について、是非とも学術的な見地からのガイドラインの作成をお願いしたいです」

**【記述41】私立認定こども園，男性，経験25年，園長・所長・施設長**

「マスク着用についても、メディアに振り回されたり、各園によって異なるなどのバラツキから賛否両論が起こり一本化のために強い要請を行い反発を受けたこともありました。新型コロナの対応から、保育界の制度のバラつき、そこから起こる保育士の認識のバラつきを感じられます。どのタイプの保育施設であっても一貫性のある政策・対応を求めます。それによって、法令・ガイドライン遵守の意識が高まると考えます」

## 差別と偏見

パンデミック1年目は、得体の知れない未知のウイルスに対する恐怖から、医療従事者差別や“コロナ警察”など、ある種のパニック現象を数多く生んだ。管理職としては、そうした差別・偏見から子どもはもちろん、保護者や職員も守る必要にかられた。記述42～44には、そのような緊張感が表れている。差別や偏見は、外部からだけでなく、まさに普段はコミュニティのメンバーである園内で生じることが最も恐ろしいことであろう。

【記述42】私立認定こども園，男性，経験18年目，園長・所長・施設長

「この一年は偏見との戦いでもありました。マスクをつけられない2歳児以下の子どもたちが散歩に出れば奇異な目で見られ、保育所でクラスターが起こるたびに危ない現場として認識され、保育士の職業についても偏見を持ってみられるなど、偏向した下世話な報道からくる差別的な扱いに深く傷つけられた」

【記述43】企業主導型保育園，女性，経験2年，副園長・教頭

「比較的感染者の少ない地域であるため万が一感染者が出てしまった時、地域での誹謗中傷の的にならないようにしなくてはとの思いが強かった。それは、この園に通う子どもや保護者、職員を守らなくてはという思いが強かったからだと思います」

【記述44】私立認定こども園，男性，経験16年，副園長・教頭

「常に閉園と再開の手順を頭に入れながらの運営は、なかなか緊張感があるものです。特に心配なのが、感染者が復帰した後のことです。差別的な扱いがないようにするにはどのようにしたらいいのかということについて、想定と現実の違いをまだ経験していないため、心配はあります」

## 感染症への理解

特に3歳未満児を預かる保育現場では、日ごろから感染症への意識は高く、看護師や栄養士などの配置もあり、専門的知識を備えた現場である。しかし、COVID-19に対して強化された対策によって、これまで毎年流行していた感染症の多くが鳴りを潜めることとなった。それによって得た感染症についての知識の更新が、記述45～47のようにふり返られている。

【記述45】企業主導型保育園，女性，経験2年，副園長・教頭

「コロナ感染者が出ることは無かったが、同時期に「RSウイルス」が流行し、一気に子どもたちに広がっていったため、ウイルスの感染力の強さを知りました。保育室内の消毒や子どもたちの体調管理に神経をつかった一年でした」

【記述46】私立認可保育所，女性，経験28年，主任保育士

「感染対策について行事・生活の流れや保育など見直し再確認の多い一年でした。その中で、手洗い・うがいを丁寧に行うようになり、その丁寧さが身についたと思います。お蔭でインフルエンザや感染症にかかる方が少ないと感じます」

**【記述47】 私立認定こども園，女性，経験30年，園長・所長・施設長**

「0歳児の冬の下痢等が流行しなかった。つまり例年の感染予防ができていなかったことになります。保育者の感染防止手順が見直されたことはかえっていい結果になったと思います。その反面、乳児が感染しながら身体が病原菌やウイルスに強くなっていくであろう過程が経験できていないことが、今後の注意点と考えます」

**「子どもにとって」を考える**

日々の感染対策やクラスター発生、差別や偏見への恐れを感じながらも、管理職の多くが子どもにとって本質的に重要なことの確認をふり返っていた。記述48や49がその例である。こうしたふり返りには、過剰な感染対策によって子どもから奪ってはいけない内容は何かという問いや、制限の多い生活の中でも普段と変わらない子どもの様子に驚き、励まされている様子がかがわれる。

**【記述48】 私立認可保育所，女性，経験33年，園長・所長・施設長**

「子どもたちが群れてじゃれ合う日常は変わらない、変えてはいけないと思います。マスクをすることの弊害は恐らく思いのほか大きいと思われ、特に0歳、人の顔を注視しながら感情や口の動き、言葉を吸収する段階の子どもたちにとって、どんな悪影響があるかと思うと怖いです。当園では0歳児クラス、1歳児クラスでは口の見えるマスキールドを装着している。0歳児クラスでは、マスクを外し、マウスシールドにしたとたん、保育者の顔や口元をじーっと見る子どもたちの姿が戻りました。1歳児クラスは、絵本を読んでいるとき、子どもがおもむろに保育者のマスクを下げ、口元を見たがったです。黙食はさせていない。透明な仕切り版は手作りで作成して使用しています。今現在、人としての自分を育てている子どもたちにとって、させてはいけない経験がソーシャルディスタンス、触れ合わない、黙って食べるなどだと思います。そこで損なわれる人間性の方が怖い」

**【記述49】 公立保育所，女性，経験38年，園長・所長・施設長**

「今思う事は、子どもたちはおかれていた状況の中でちゃんと生きているということをつくづく感じます。例えば、マスク生活の中でもちゃんとしている子もいれば、喋るたびにずれていってしまう子もいるし、噛んでびしょびしょにしてしまう子もいる。でもマスクをしないと不安になる子はいない。大人がいうからやってるけど子どもたちにとっては本当はどっちでもいいのだろう。黙食はそもそもコロナでなくとも、喋らず食べることを実践している園、クラスはあるし、食事に関しては大人の考え方やそのクラス、子どもたちによってアプローチが変わって来たりする。過去に年長で食事している時は「ゼロの声」と言うことをやった事がある。おしゃべりばかりで食べることに集中できず、だらだらとした食事をするクラスだった。「ゼロの声」が習慣になると大きな声で喋っている中では「うるさい…」と子どもたちが言うようになった。こんなふうに、保育の取り組みとしてやった事と感染防止のためにやっている今と子どもたちにとっては与えられた環境でしかない。それでもその環境の中で学んでいる事はあるように思う。今までの日常が失われて、あれもこれもできなくなった…とは子どもたち自身はあまり感じていないように思う。今までの生活を元に戻そう、取り戻そうとする事に視点を合わせるのではなく、コロナであってなくても子どもたちと新しい価値観を見つけていく事が大切なのかなぁ…と思っています」

### 〈行事と保護者〉

若手・中堅、熟練者と同様に、管理職においても全体として「行事の見直し」につながったというふり返りが多く記述された。ただ、そこには保護者との関係に関するジレンマがより強く現れている。

#### 「子どもにとって」と「保護者にとって」の間で揺れる

感染症拡大を防ぐ最も重要な対策は、当初から人流を抑制することだと言われてきた。そのため、多くの保育現場では、保護者が園舎内に入ることや行事などの保育活動に混ざらないという対策を取ってきたと考えられる。それは感染を拡げないためであると同時に、保育の対象である子どもの経験を守ることもあった。その結果、後述するように、普段よりも職員間の活発な話し合いがあり、新たな工夫を試みることによってむしろ例年に比して子どもにも保育者にも充実した保育内容になったというふり返りも多かった。しかし、そのことは、記述50～53にもあるとおり、保育と保護者との間に壁を作ることもあったと考えられる。

#### 【記述50】私立認定こども園，男性，経験10年，園長・所長・施設長

「コロナ感染防止対策のため、園行事等の活動が制限されたことが一番の変化です。そのため、従来の園活動を期待している保護者は園活動への不満度が高まっています。一方、保育・教育の内容については、行事等の開催が大幅に少なくなったため、子どもも保育者も時間に追われることもなく、以前より充実した日々の保育環境となっています」

#### 【記述51】私立認定こども園，女性，経験25年，園長・所長・施設長

「3密を防ぐことがむずかしいと言われる乳幼児期の保育では、外部からの感染を可能な限り防ぐための対応をしています。そのため、保護者の行事参加をなくしたり、行事そのものをなくすことも行いました。子どもたちの成長に大きな影響はありませんが、保護者の満足度が低くなっている点になります。そのため、YouTubeで動画配信をすることも行いました。動画配信に関しては、園での子どもたちの様子を見ることができたと高評価ではありましたが、データが欲しいという声があるなど、対応に苦慮しました。行事開催においては、大きなクラスターを発生させないために、保護者参加が難しいと考えられますが、恐れてばかりではいけないのかと葛藤があります。一番苦勞したことは、保護者対応なのかもしれません」

#### 【記述52】私立認定こども園，女性，経験26年，園長・所長・施設長

「1年の過ごし方はおおむね例年通りでしたが、特に変化があったことは保護者の園に入ることを避けたこと、消毒やマスクの着用などに気がついたことでした。1学期は6月からスタート。参観や個人面談、保護者会は一切中止としました。反面、先生たちがその行事にエネルギーを使わなくてよい分、子どもたちはのびのび過ごしていたように感じました。(…中略…) 運動会では、今までは組体操や、パラバルーンなどの練習に時間を割いていましたが、密を避けるためにやめ、踊りとかけっこ、又はリレーなどの各学年2種目のみとしました。すると練習に掛ける時間が短縮された分、どのようにすれば勝てるのかを子どもたち同士で相談しあう時間を設けることができたり、お散歩に行ったり、自分たちでお屋さんごっこを展開したりする時間を確保することができ、子どもたちの生き生きとする姿を見ることができました。運動会の保護者の入場は各ご家庭1名しかできず、週日に行い、午

前で終わりにしました。保護者の方のためには、申し訳なかったですが、子どもたちはそれでも十分に達成感を感じ、大きな成長も見せてくれました」

【記述53】私立認定こども園，男性，経験20年，園長・所長・施設長

「私達がなすべきことは、親のための就労支援なのか、子どものための幼児教育なのか、考える事を突きつけられた。私は後者だと思い至り、今後、子ども自ら学びとる環境を整え、守る道に進む事を決しました」

こうした保護者への対応の難しさは、おそらく多くの保育現場に共通するパンデミック1年目のふり返りであろう。ただし、保護者の関与が制限される中でも、行事のあり方や位置づけそのものを見直したり、保護者にとっての行事の意味を精査したりする中で、保護者の理解も得られたという回答も少なくなかった。記述54では、「行事に追われ」という、日本の保育現場でしばしば語られる課題の見直しにつながる可能性が示唆されている。記述55では、行事をクラスごとに分けたことにより、保育者の手にゆとりができ、準備も余裕をもって行えた様子が記されている。しかし、それによって保護者が年齢が上のクラスの子どもの様子を見て我が子の成長に見通しを持ったり、子どもが上の年齢の子どもの姿を見て憧れの気持ちを持つなど、保育上重要な側面にデメリットがあることも確認されている。

【記述54】私立認定こども園，男性，経験12年，園長・所長・施設長

「新型コロナウイルス感染予防のため、多くの行事が見直しもしくは中止されました。幼稚園・認定こども園は毎月毎月行事に追われています。子どもたちがゆったりと過ごすには、行事が多いと感じていました。保護者ニーズもあり行事の数を減らすのは難しい事ですが、昨年減らしもしくは見直して、これでも良いのではと感じる保護者が増えてきました」

【記述55】私立認可保育所，女性，経験12年，主任保育士

「この1年の保育で、自分の園の保育や行事を見つめ直し、新たな発見がありました。2大行事（運動会・発表会）を平日開催かつクラス別開催にすることで、子どもの受け入れの際、日常と変わらずに受け入れ、保育士も手厚い中で開催することができ、子どもたちの日常の姿をお見せすることができました。また、終了後そのまま保護者と降園する家庭も多く、保育人数も減るため、各クラスの事務時間や保育材料の準備に時間を回すメリットがありました。しかし、例年の様に他クラスの発表・姿が見えないことは、保護者の中での成長の見通しや子どもたちの憧れの姿を伸ばす機会を減らしてしまうことのデメリットにもつながると園内で話がありました。正解のないコロナ禍の保育でも、できることを最大に行う方法を提供した1年でした。保護者とも、密に会話ができず、若手保育士はかなり保護者関係に悩んだ1年だったのではないかと思います。主任としても改めて信頼関係構築の手段を考えたり実践したりと提起してみましたが、職員もこのコロナ禍で疲労困憊でした。願いや思いの周知、話し合いは難しかったと感じました」

### 保護者との葛藤やコミュニケーション不足

休園や行事の見直し（中止や保護者の不参加等）は、どの現場においても保護者との間に葛藤をもたらしたと考えられるが、それがこじれてしまうか、協働的な関係になるかは、様々な

要因によって違ってくるようである。記述56～58は、より困難を抱えた現場からのふり返りであろう。

**【記述56】私立認定こども園，女性，経験7年，主幹補助**

「絶対的な解はない中で、自園のできる限りの最善の方法を採用してきましたが、保護者の方の受け取り方は本当に様々でした。それにより、深く傷ついた保護者・深く傷ついた職員がいました。正直、人間の心のありようを考えさせられる1年でした」

**【記述57】私立認可保育所，女性，経験9年，園長・所長・施設長**

「新園長となった年だったため、本当に大変な1年でした。(…中略…) 匿名の保護者から、保育園からのお願いばかりでこちらのお願いを聞いてもらえないというような箇条書きの苦情を受け取りました。コロナ禍の中で、保護者の方も大変なストレスを受けていたのだと思うと同時に、保護者の室内への立ち入り制限などのことが、保育者と保護者のコミュニケーションを希薄にさせたことを反省しました。新しいオンライン配信の方法も導入し、保育園の様子が伝わるようにと心がけてきましたが、また来年度は、気をつけるべき点もわかってきたため、保護者参加の行事も工夫しながら取り入れていきたいと思います」

**【記述58】国立幼稚園，女性，経験30年，副園長・教頭**

「休園等に関して、幼児教育施設は、保護者の就労形態によって対応に差が生まれました。やむを得ないこととはいえ、子どもたちの年齢は同じであっても、子どもを取り巻く環境によりこんなにも差が大きくなってしまふことに対して疑問をもちました。(…中略…) 休園中、保護者に電話をして体調等の聞き取りをしたのですが、時間が経つにつれて保護者がイライラしていて、電話の時間も長くなったことが気になりました。現在も「かわり」が何かしら制限されていて、子どもと保護者だけの閉じられた生活になりがちです。こうしたことが、子どもの育ちに、今後何らかの形で影響を及ぼしているのではないかと危惧しております」

## 保護者との協働

一方で、保護者と協働して問題解決に当たることができたり、こうした状況ゆえに普段よりも更に保護者と良好な関係を築くことができたと振り返る管理職も少なくなかった。その例として記述59～61があるが、特に記述61はパンデミック以前に保護者とのような関係を構築しているかが重要であることを示唆している。回答内容からすると、保護者が集団的に登園日を調整してくれたおかげで、保育者の業務に見通しと余裕ができ、その空いた手を、(おそらく何らかの事情で申請に困難を抱える) 家庭の給付金申請を援助するために活用したということであろう。こうした協働の対応は決して容易ではないと思われるが、子育てを総合的に支援する福祉機能も備えた認定こども園や保育所では、一つの理想的なエピソードであるともいえる。

**【記述59】公立保育所，女性，経験25年，園長・所長・施設長**

「保護者との関係においても要望や疑問に対して検討して返し、また検討するを繰り返す、双方の理解につながる経験をしました。一つひとつが当たり前でなく、その意味を考える自分で考える、子どもと考える、職員と考える、保護者と考える。とにかく今は何を大事にするべきかを考えて、考えて過

ごした日々でした」

【記述60】私立幼稚園，男性，経験10年，園長・所長・施設長

「年間行事というものはどこかマンネリ化しやすい部分もありますが、当たり前がそうでなくなった今年度、感染対策の上でやむを得ず見送らざるをえなかった行事がある中で、職員間や保護者会でアイデアを持ち寄って新しい試みで行った行事もあります」

【記述61】私立認定こども園，男性，経験21年，園長・所長・施設長

「保護者との関係性を今までも大事にしたおかげで普段通りの保育が展開されました。その上で保護者への国の助成金や給付金などを代行申請をしたりと園児の登園を保護者間で調整してくれた分の保育の軽減をそういった業務に充てたり、子どもの活動の充実充実に充てられて普段以上に保護者や地域との関係性が構築されたと共に子どもたちの探究もふかまり、保育者にとっても充実した年度になったと感じています」

### 保護者に励まされたこと

保護者との関係の多くは、緊張したものであったかもしれないが、保護者からの言葉や喜んでくれた様子に励まされたというふり返りも見られた（記述62～64）。

【記述62】私立認可保育所，女性，経験27年，園長・所長・施設長

「全ての行事の見直しや、短縮に対して保護者から様々な意見が出てなかなか理解頂けない事もあり気持ち落ち込んでいる時、2歳児の保護者から「先生たちがコロナの中で頑張って保育してくれていてありがたいです」との、言葉に救われ明日からの活力になりました」

【記述63】私立認定こども園，男性，経験20年，園長・所長・施設長

「私共の園においてもコロナ感染が発生し、臨時休園を余儀なくすることとなり大変な1年でした。当初はできない、やらないとしていた保育内容でしたが、感染対策を講じて何かはできるのではないかと、何かはしようと考えは変わりました。というのも、感染が発生した時の保護者の対応が大きかったように感じます。マイナスのご意見を頂くことより、ここまでして頂いて発生したのは園のせいでもない、誰にでもおこりうること、先生方も大変だからと温かいお言葉ばかり頂いたことで、園全体が一体感をもって保育を進めることができるようになったと感じます」

【記述64】地方型保育（小規模、家庭的、居宅訪問、事業所内），女性，経験6年，園長・所長・施設長

「親子遠足と運動会は中止しました。参観日は日程変更して実施し、お遊戯会と卒園式は規模を縮小して実施しました。行事は子どもたちの成長を保護者とともに共有できる貴重な機会であるため、コロナ渦においても工夫して実施することで保護者も喜んでいる様子を肌で感じることができました」

### ローカルガバナンス

今回のような危機事態において、保護者や地域と協働的な関係を確認したり、築いたりできた保育現場の管理職からは、「顔の見える関係性」における「ローカルガバナンス」の重要性を実感したという声もあった。COVID-19感染拡大に伴い、園内外でのICT化やオンライン化

が促進されたことをメリットとしてふり返る管理職も多かったが、一方で、身近な人間関係への再認識があることも看過できない。

【記述65】私立認可保育所，男性，経験20年，園長・所長・施設長

「保護者や地域から寄付やお手伝いの申し出，感謝のお言葉を頂くことが随時ありました。その都度，気持ちも含め助けられました。危機の際にローカルな顔の見える関係性の大切さを改めて思い知らされました」

【記述66】私立認可保育所，男性，経験24年，園長・所長・施設長

「当園では，今年〇月にクラスターとなりました。その際に感じたことです。最終的には全園児，全職員がPCR検査を受けることになり，職員と園児に複数の陽性者が出ました。保健所からは子どもの心の育ちも大切ですが，決められた範囲内で遊ばせるなど対策を行い，保育の方法を改めた方が良いのではないかと言われました。一齐に子どもを動かし，決められた範囲内で決められた活動を行っていれば，感染が拡大せず，大規模にもならず済んだところですが，自分の遊びは自分で決めるというように行ってしまうと私の園のようになるのだと感じました。（…中略…）自由と安全確保の関係がトレードオフの構図にあるとは思いたくないのですが，いろいろと考えてしまいました。実際に大規模検査にまで発展してしまうと，綺麗ごとだけでは済まなくなってしまいます。利用者である子どもと保護者はどのように考えているのかという意見を聞くべきであろうと考え，参加を希望する保護者とオンラインミーティングを開催しました。悪い方向であると覚悟していたのですが，保護者からは，今まで通りの保育を継続してもらいたいという意見しか挙がってきませんでした。そして，その体制を維持するために保育園発ではなく，保護者会発信で全保護者向けにプリントを作成していただくことになりました。自分たちが暮らす社会のルールは，自分たちで作るべきといった思いを強く感じました。ローカルガバナンスとはこのようなことであると実感しました」

### 〈職員への視点〉

#### 若手・中堅と熟練者の記述から

管理職による職員への視点の前に，若手・中堅と熟練者による職員をめぐるふり返りに触れておく。記述67は，例年より職員同士の「共有感」が得られにくかったことを述べるとともに，おそらく緊急事態宣言時に登園児数が減った際のことだと思われるが，そのことが直接的に非正規職員の雇用を危うくする事実気づいている。同時に，正規職員との意識の差を感じたとふり返られているが，記述68は逆にパート職員の視点から，おそらくは正規職員に向けて，厳しい疑問がつけつけられている。保育現場は，この20年余りの規制緩和や保育長時間化の影響を受け，非正規雇用者が増加傾向にある。そのため，通常の保育においても，保育者間の意思疎通や子ども・保護者の状態についての共有・連携が課題となっている。記述69で指摘されているように，感染対策により休憩室の利用が制限されたり，園内研修や職場の親睦を深めるための職員行事（歓送迎会等）が行えない状況の長期化が，とりわけ正規職員と非正規職員のコミュニケーションを難しくしているのかもしれない。

【記述67】公立保育所，女性，経験15年，担任，1・2歳児

「一齐での行事が分割されて，職員間の繋がり(考える時期や忙しい時期が異なり共有しにくい)につい

て、子どもを育てているという共有感を今まで以上に意識すべきだと感じました。また、非正規職員は子どもが少なくなると、仕事としての保障が危ういことがありました。正規職員との意識の差みたいなものを感じました」

【記述68】私立認定こども園，女性，経験13年，フリー・加配，3歳以上児

「コロナを理由に、考えることや子どもの成長のためのことをさぼっていたことが多かったように感じます。パートで、意見をあまり言えなかったが、感染対策と怠慢は一緒ではないのではないかという疑問をずっと持っていました」

【記述69】私立認可保育所，女性，経験27年，担任，担当年齢不明

「休憩室が混み合わないよう休憩時間も、職員同士あまり喋らないように気かけたり、交代しながら過ごしていたが、今まで子どもたちの様子を共有していた時間が、減っていると感じています」

### 業務と労働環境への問題意識

上記のように、管理職以外の職員も、職員間の関係づくりの難しさなどをふり返っているのであるが、管理職においては、職員への感謝を述べる例も多く、加えてより高い視野から課題が指摘されていた。記述70は、「休憩室」という、保育関係者以外にはあまり知られていない（意識されていない）保育現場の環境についての問題意識が述べられている。日本の保育施設は、とりわけ保育所において子どものための面積基準も不十分だと考えられるが（若手・中堅の記述15でも指摘されている）、職員の労働環境の面からも課題が大きいといえる。平常時には、保育者と子どもの工夫と努力によって何とかしのいでいる現場でも、新型感染症の拡大という事態になったときには、その環境の脆さが露呈する。

記述71と72は、感染対策に伴って保育者の業務量が増えることの懸念を述べている。一方で、記述73では、「行事の削減」が業務量の削減につながったとふり返っている。保育内容上必要とみなして行っていた行事の削減により、やっと適正な業務量になるということを単純に“改善”と見なして良いかどうかは議論の余地があるが、感染対策で業務量がオーバーフローしたことで、かえって保育者としての適正な労働の量と質が吟味されることには積極的な意義があるだろう。

【記述70】公立保育所，女性，経験37年，園長・所長・施設長

「私の勤務している自治体の公立保育園は、このような感染症に対応できていない設備ということを強く感じました。保育室やトイレ等の生活する場の狭さと古さ、備品等がすぐには購入できないなど対応が遅くなってしまふなど現場が大変になることが多かったと強く感じました。職員の休憩室も狭いうえに他に部屋がなく、この1年は職員の休憩がきちんととれなかったのではと思います。職員は健康管理に細心の注意を払ったこともあり、発熱等で休むことはほとんどありませんでした。体調が悪くなる前に、またリフレッシュのために休暇を取りあおうという意識も高かったと感じます。本当にありがたかったです」

【記述71】公立保育所，女性，経験41年，園長・所長・施設長

「保育士の仕事量の膨大さを感じました。保育士は、子どもに寄り添い健やかな発達を助ける大切な仕

事です。コロナになりそのことよりも消毒や清掃に重点が置かれています。このような仕事は区別して保育士ではない職種の人に委ねても良いのではないのでしょうか。あまりにも保育士が大変であると感じた1年でした」

【記述72】公設民営認定こども園，女性，経験20年，園長・所長・施設長

「できることも多数あったかと思いますが、現場の職員のケアも必須でした。通勤することが当たり前＝不安であり、報道では医療従事者が主に敬意を払われているが、保育従事者も貢献度が高いと感じているということから、不安感が募りました。リモートならできる＝業務過多を引き起こす可能性があります。学びになったことも多々あったが、1年を振り返ると、心身ともに厳しい状況でした。しかし、どんな状況下であっても子どもは育ちの歩みは進んでいきます。だからこそ、この仕事の重要性がもっと社会に伝わってほしいと改めて感じました」

【記述73】私立認可保育所，女性，経験34年，主任保育士

「コロナ前、仕事量の削減について大きな課題としていました。自粛期間を経て、行事の削減により、凶らずも仕事量の軽減につながりました。ただ、それだけで良かった、とするのではなく、これを契機に次年度以降のことを考える正念場を迎えます。現場では、消毒作業などの別の負担や、保護者へ保育をどう伝えていくかという大きな課題も生まれ、頭を悩ますことは増えていますが、職員の仕事に対する考え方を柔軟にし、変換させるきっかけになったと捉えています」

### 職員間の話し合いや研修機会の促進

後述する〈保育の工夫と見直し〉とも関連することであるが、多くの管理職が、職員間の話し合いが増え、考えながら保育を進めるようになったことをふり返っている。記述75～77にあるように、以前は意見を出し合う職場の風土・文化が無かった現場にも、こうした変化を引き起こしたようである。また、パンデミック1年目の後半以降になって、機器やアプリケーションが普及するにつれ、オンラインでの研修機会が増えたことも、保育を変える契機になるとして積極的に受け止める記述78のようなふり返りも少なくない。

【記述74】私立幼稚園，女性，経験17年，園長・所長・施設長

「何が正解かということがまったくわからない始まりでした。手探りの中、園全体でできないことなく、できることを探そうという視点に切り替えてからは、前向きに進むことができました。若い職員を不安にさせないよう、園長、主任を中心にこれまで以上に話し合いの場をもつよう心がけました」

【記述75】私立認定こども園，女性，経験33年，園長・所長・施設長

「あまり変化を好まない園だったため、職員で意見を出し合い考えるというきっかけになり、チャンスの年でした」

【記述76】私立認定こども園，女性，経験年数不明，園長・所長・施設長

「今までと同じで何となくやれば良いという文化があったため、変わらざるを得ない状況に対して、経験年数の長い職員程、戸惑いがあったように感じます。その反面、若い職員のアイデアが活かされるようになり、意見が出やすくなりました」

【記述77】私立認定こども園，女性，経験13年，主任保育士

「語り合う時間がなかった園で，対策をどうするかか行事をどうするかか…例年通りはだめだから「ではどうするのか?」と言うことを繰り返し考え続けることができた一年だったと思う。繰り返すうちに，子どもたちに感じてほしいことや子どもたちの経験の意味を大人同士が考え合えるように少しなってきた」

【記述78】私立認定こども園，女性，経験30年，園長・所長・施設長

「WEB研修が増えたことにより動画配信などで，職員の研修チャンスが増えました」

### 〈保育の工夫と見直し〉

#### 当たり前を見直す

職員間の話し合いや意見交換は，変革ありきではなく，具体的な問題解決のために行われるようになった。そのことの意味は大きいだろう。パンデミック下の保育を経験してきた者はおらず，すべては手探りであった。そのため，上の記述76にもあるとおり，経験の多寡を問わず，若手の意見も積極的に受け止める雰囲気醸成されたのは自然であろう。その中から，そもそもの当たり前を見直す構えが共有された現場も多かったようである。記述79と80には，こうした変化の肯定的なふり返りがあり，記述81にはその具体的な実践例が生き生きと綴られている。記述82と83は，COVID-19パンデミックの終息後も見据えて，保育を変えていきたいという展望が述べられている。

【記述79】私立認定こども園，女性，経験42年，園長・所長・施設長

「当たり前が当たり前にできないことを改めて考え直す期間となった。まず，災害だけでなく「命を守る」ことを保育の中に位置づけていった。衛生管理を神経質に行うのではなく日常に必然のこととして行えるよう工夫した。ストレスを保護者や職員・子どもに感じさせないようにするには，自然の中に出かける・行事にとらわれないなどを考え一年の過ごし方を大幅に見直した。結果，さらに子どもにとっては良い方向に導けたとを感じる」

【記述80】公立保育所，女性，経験37年，園長・所長・施設長

「今まで当たり前と思ってやっていたことを見直すきっかけとなった1年でもありました。集会形式で行っていたことを違う形でも楽しめること，例年行っていたことを「なんのためにやるのか」から考え直してやめにしたり，形を変えたり，今までの保育を見直す良いチャンスになったと感じます。こんな状態だからできないのではなく，こうしたら面白いかも，やってみようと思えることができる職員集団ということも強みとして職員全体で確認できたので，これをさらに進めていきたいと考えています」

【記述81】私立認可保育所，女性，経験25年，園長・所長・施設長

「保育のエピソードとしては，クッキング見送りを，できないと捉えず，園庭に畑を大きくとり，さつまいも，稲，トマト，藍，お花類を育てていきました。稲は，年長児の年間通しての主体的活動になりました。いちから調べながら育てる。収穫後の穂は，お正月飾りにして玄関に飾りました。藍は，近隣園からいただき，幼児クラスで育てました。藍プロジェクトと銘打ち，報告し合いながら保育園

交流をしました。自園は、高架下の園。JRさんとの交流では、zoomで交流をして、電車の乗り方紙芝居をみたり、質問タイムを過ごしました。プロジェクターを使って等身大の駅員さん登場に大喜びの子どもたちでした」

【記述82】私立認定こども園，女性，経験18年，園長・所長・施設長

「丁寧に振り返ろうとすると疲れたや大変だったなどのネガティブな感情も出てきてしまいますが、新しい取り組みが出来たり新しい視点を頂けたことは、コロナ禍における乳幼児期の教育保育を考える上で良いきっかけになったと思えることもたくさんあります。新しいことを考え、生み出す大変さはもちろんありますし、今もなお現在進行形で試行錯誤の毎日ですが、子どもの生活を守ることと子育て中の家庭を支えるという視点を中心においた時に、大切にすべきことが洗い出されているような気がしています。今後も元の生活に戻るのではなく、園としてより良い風土作りができるように試行錯誤していきたいと思っています」

【記述83】私立幼稚園，男性，経験15年，園長・所長・施設長

「戦後以来の大きな社会構造の変化が起こったことで、今後の乳幼児の教育・保育は大きく変わると感じています。コロナを危機とするのではなく、より良い教育・保育に繋がるためのチャンスだと捉え、強制的に変えられるのではなく、自ら変わることが必要とされていると感じています」

### 少人数保育のメリット

若手・中堅の記述15と16、熟練者の記述26と27にも見られたように、感染対策として生じた少人数の受け入れや分散登園等の対応により、それまで保育者たちが経験的に感じてきた適正な保育人数が実現したのもパンデミック1年目であった。その気づきは、管理職にも共有されたと思われる。記述84では、後段で「うまくいったという手応えはあまりない」と述べられているものの、子どもの数が半分になったことにより、「その間にできることはないか」と考えるゆとりが生まれたことがわかる。記述85では、緊急事態宣言下において「理想的な慣れ保育」の状況が生まれたと述べられている。通常は実験的な検証が許されない保育実践において、パンデミック下のこうした経験を記録・記憶しておくことは、COVID-19終息後の保育のあり方を議論する上で不可欠のエビデンスとなるだろう。

【記述84】私立認可保育所，女性，経験17年，主任保育士

「4月の緊急事態宣言中は、子どもの数が半分に減り、手厚い保育ができました。その間にできることはないかと、普段の保育をより丁寧にこなって、保育の基盤を作ろうと思いました。うまくいったという手応えはあまりなくて、やはり保育は1人ではできない、チーム全体で進んでいくものなのだと改めて実感しました」

【記述85】私立認可保育所，女性，経験32年，園長・所長・施設長

「0歳，1歳児クラス新入園児の受け入れについて、今年度は4月初めに緊急事態宣言が出せたことにより4月5月は限られた職種の保護者の子どもたちのみを受け入れる応急保育となりました。0歳，1歳児クラスの園児を含め10名ほどの異年齢小集団での保育は新入園児の子どもたちも楽しい雰囲気の中、初めての保育園生活を送ることができました。また6月以降、通常保育の再開後も2～3

名ずつの新入園児がひと月ごとに徐々に慣れ保育を始めていくということができ、毎年、一度に1クラスで10名ほどの新入園児を受け入れる雰囲気と全く違い、ゆったりと受け入れることができたと思います。行政側が決めた入園が決まったら1か月後に必ず職場復帰をしなければならないということではなく、保護者も子どもが園に慣れたら職場への通勤を再開するという子どもにとっても理想的な慣れ保育だったと感じました」

## 結語

本稿では、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミック1年目の終わりに、保育者たちが何をどのようにふり返るのかに焦点を当ててきた。最初の緊急事態宣言（全都道府県対象は2020年4月16日～5月25日）の渦中から行われてきた各種調査が、その時期その時期の実態を明らかにしてきたことに対して、本調査は保育者たちに1年目をふり返ることを求めた点が特徴である。また、そのふり返りを、若手・中堅保育者、熟練保育者、管理職というキャリア別に整理し、それぞれの視点を比較検討した点も重要な特徴であろう。

結果として、若手・中堅保育者では日々の保育における具体的な困難や気づきを中心とし、熟練保育者では日々の具体に加えて子どもの発達への懸念や保護者との関係についてのふり返りが見られ、管理職になると保護者や職員という保育現場の大人に対するふり返りが増してくる傾向が確認された。これは、それぞれの経験や立場を考えれば当然の結果とも言える。しかし、同じパンデミック1年目を現在進行形で経験していても、同じ職場にいる者同士で焦点や観点が異なるという事実を確認する意義は小さくないだろう。

たとえば、若手・中堅の中には、行事の中止によってゆとりが生まれたことにより、先輩保育者に丁寧に指導してもらったことができたことを喜ぶ経験1年目の保育者のふり返りもあった（記述14）。「行事に追われ」る保育は、子どもにとっての課題とともに、経験の浅い保育者の成長にも負の側面を持っていることに気づかされる。実際には、緊張感の高い状況下で、新人保育者が先輩や管理職に「自分にとっては良かった」と伝えることは難しいかもしれない。本調査の結果を踏まえて、それぞれの職場の同じような若手の心理に気づくことができるかもしれない。

本稿を閉じるに当たり、保育者のふり返りから全体を通して示唆される、“アフター・コロナ”の保育を展望する上で重要な視点や課題を以下に記しておく。

- ① 危機事態においてこそ、平常時からの大人同士の関係性・コミュニケーションの質と量がものをいう。大人同士の関係性は、危機を創造的に乗り越える協働を可能にするばかりでなく、差別と偏見に対する防波堤となる。
- ② 日本の保育にとって行事は不可欠であるが、子どもや保育者の日常を大きく制約する足かせの意味も持っている。保護者との共通理解も進めながら、適切なあり方と量を精選し、保育における各行事がもつ意義を再確認することが求められる。
- ③ 保育者の仕事は、同じくエッセンシャルワーカーとして社会的価値を獲得している医療従事者等に比して、評価においても処遇においても十分とはいえない。そのことは個人単位の評価と処遇の問題にとどまらず、危機事態では非正規職員の雇用不安定化や休憩

室の不備など、制度的・構造的な問題を背景とした困難として現象する。

- ④ 危機事態ゆえに生じたゆとりある保育者と子どもの人数比により、要領や指針に謳われるような子ども一人一人を尊重する実践が可能であるというエビデンスが得られた。不十分な職員配置と面積基準・保育環境基準を見直すことを通してこそ、パンデミック下で見いだされた保育の見直しが実現可能になる。
- ⑤ 同じ乳幼児期の子どもの成長発達を支える施設の形態や条件が異なりすぎており、公的保育・教育として満たされるべき基準が十分に精査されていないことが露呈した。地域性や社会経済的条件を背景とした多様性を保証しつつ、平常時のみならず危機事態も想定し、施設種別を問わない共通のガイドラインや最低基準の確立が必要である。

## 文献

- 足立里美・柴崎正行（2010）. 保育者アイデンティティの形成過程における「揺らぎ」と再構築の構造についての検討：担任保育者に焦点をあてて. 保育学研究, 48, 213-224.
- 樋口耕一（2020）. 社会調査のための計量テキスト分析：内容分析の継承と発展を目指して（第2版）. ナカニシヤ出版.
- 保育研究所（2021）. 月刊 保育情報 No.532 全国保育団体連絡会.
- 石井正子・木村英美・横山愛（2021）. 新型コロナウイルス感染症流行下で、保育者はどのように子どもや家庭への支援を行ったか. 昭和女子大学現代教育研究所紀要, 6, 117-127.
- 川田学（2020）. “COVID-X”への想像力：マスク・行事・子どもの感情. 季刊保育問題研究, 306, 18-29.
- 宮澤礼子・田宮縁（2021）. 静岡県における「感染症対策指導支援事業」の成果と課題：新型コロナウイルス感染症対策を通して得られた保育者の知見. 静岡大学教育実践総合センター紀要, 31, 29-40.
- 溝田浩二・佐藤みちる（2021）. 新型コロナウイルス感染症は保育現場にどのような影響を与えたのか：宮城教育大学附属幼稚園におけるアンケート調査から. 宮城教育大学環境教育研究紀要, 23, 15-24.
- 七木田方美（2021）. 保育者のマスク着用が保育や子どもに与える影響：COVID-19禍による. 保育と保健, 27, 13-17.
- 野澤祥子・淀川裕美・菊岡里美・浅井幸子・遠藤利彦・秋田喜代美（2021）. 保育・幼児教育施設における新型コロナウイルス感染症に関わる対応や影響についての検討. 東京大学大学院教育学研究科紀要, 60, 545-568.
- 小田幹雄・橋浦孝明（2021）. 宮城県仙台市における保育現場の新型コロナウイルス感染症対策の現状について（第1報）. 羽陽学園短期大学紀要, 11, 187-204.
- 及川智博（2021）. COVID-19感染拡大下の保育者に困難感を生じさせていた要因の検討：有事下の葛藤にみる保育の質の保障. 社会保育実践研究, 5, 27-37.
- 横井良憲・鈴木裕子（2021）. 新型コロナウイルス感染症COVID-19の中での保育施設の課題. 愛知教育大学教職キャリアセンター紀要, 6, 19-26.

## 保育関連団体や研究機関による調査報告書のURL

- 一般社団法人全国保育園保健師看護師連絡会(2020).新型コロナウイルス感染症対策に関するアンケート調査結果  
(<https://www.hoiku-kango.jp/index.php/2020/05/24/1615/> 2022年3月27日閲覧確認)
- 公益社団法人全国私立保育園連盟調査部(2020a).『新型コロナウイルス感染症に関する調査』報告書  
([https://www.zenshihoren.or.jp/pdf/tyousa\\_20200512\\_01.pdf](https://www.zenshihoren.or.jp/pdf/tyousa_20200512_01.pdf) 2022年3月27日閲覧確認)
- 公益社団法人全国私立保育園連盟調査部(2020b).『新型コロナウイルス感染症に関する調査2～第1波感染期間を振り返る～』報告書  
([https://www.zenshihoren.or.jp/pdf/tyousa\\_20200728.pdf](https://www.zenshihoren.or.jp/pdf/tyousa_20200728.pdf) 2022年3月27日閲覧確認)
- 公益社団法人全国私立保育園連盟調査部(2021).『新型コロナウイルス感染症に関する調査2021』報告書.公益社団法人全国私立保育園連盟.  
([https://www.zenshihoren.or.jp/pdf/tyousa\\_20210826.pdf](https://www.zenshihoren.or.jp/pdf/tyousa_20210826.pdf) 2022年3月27日閲覧確認)
- こども環境学会(2020). コロナ禍状況の保育所・幼稚園・認定こども園における休園・登園自粛への対応とこどもたちへの影響に関する調査 -中間報告- ([https://www.children-env.org/blogs/blog\\_entries/view/54/954ff321fc78f711ce873f885f3844a0?frame\\_id=63](https://www.children-env.org/blogs/blog_entries/view/54/954ff321fc78f711ce873f885f3844a0?frame_id=63) 2022年3月37日閲覧確認)
- 全国保育協議会(2020).新型コロナウイルス感染症への対応等に関する調査結果  
([http://www.zenhokyo.gr.jp/covid19/covenq\\_09.pdf](http://www.zenhokyo.gr.jp/covid19/covenq_09.pdf) 2022年3月27日閲覧確認)
- 全国保育協議会・全国保育士会(2020).新型コロナウイルス感染症への対応等に関する調査結果について  
([http://www.zenhokyo.gr.jp/top\\_kiji/covenq\\_r\\_0605.pdf](http://www.zenhokyo.gr.jp/top_kiji/covenq_r_0605.pdf) 2022年3月27日閲覧確認)
- 特定非営利活動法人全国認定こども園協会(2020). 特定非営利活動法人 全国認定こども園協会 新型コロナウイルス感染症対策に係るアンケート調査報告書  
(<http://www.kodomoenkyokai.org/news.php?d=1&id=453> 2022年3月27日閲覧確認)
- 東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター (2020). 保育・幼児教育施設における新型コロナウイルス感染症に関わる対応や影響に関する調査 報告書vol.1 (速報版) ([http://www.cedep.p.u-tokyo.ac.jp/projects\\_ongoing/research/covid-19study/](http://www.cedep.p.u-tokyo.ac.jp/projects_ongoing/research/covid-19study/) 2022年3月27日閲覧確認)
- 東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター (2021) 新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響に関する調査2021 (速報版). ([http://www.cedep.p.u-tokyo.ac.jp/projects\\_ongoing/research/covid-19study/](http://www.cedep.p.u-tokyo.ac.jp/projects_ongoing/research/covid-19study/) 2022年3月27日閲覧確認)
- 東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター (2022) 新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響に関する調査2021:継続調査第1回～第3回 園長・施設長アンケート (速報版). ([http://www.cedep.p.u-tokyo.ac.jp/projects\\_ongoing/research/covid-19study/](http://www.cedep.p.u-tokyo.ac.jp/projects_ongoing/research/covid-19study/) 2022年3月27日閲覧確認)

## 謝辞

本稿作成に当たり、新型コロナウイルス感染症対策にあたり日夜現場でご苦労されている多くの保育者の皆さまにご協力いただきました。記して感謝申し上げますとともに、乳幼児期の子どもとその家族のためにご尽力いただいていることに心より敬意を表します。

## Reflections of the First Year of the "COVID-19 pandemic" by ECEC Practitioners

Tomohiro OIKAWA, Toshihiro NAKAJIMA, Itsuki IWAYA, Sei IUCHI,  
Kazuyuki YOSHIKAWA and Manabu KAWATA

### Key Words

COVID-19, first year of pandemic, early childhood education and care practitioner (ECEC practitioner), reflection

### Abstract

This study examined what and how Japanese childcare practitioners reflected on their experiences at the end of the first year of COVID-19 pandemic. 191 informants living in 29 prefectures in Japan provided open-ended statements in three career categories: young and mid-career, experienced, and manager. Text mining was conducted separately. The results showed that the common words frequently used were "child," "early childhood education and care," "event (Gyo-ji)," and "Mask" was more frequently used by experienced workers, and "guardian" was more frequently used by managers. Furthermore, based on the results of the co-occurrence network analysis, we identified the characteristic reflections by career. The young and mid-career workers selected "responding to daily childcare issues," "considering how to organize events," and "insights and implications for practice," while the experienced workers selected "dealing with daily challenges and concern for child development" and "re-examination of daily routines or events and considerations for guardians," and the managers selected "infection control policy as a facility," "conflicts with guardians about holding events," "appreciation and consideration for employees," and "innovations and revisions in early childhood education and care," were extracted. For each category, we discussed the implications of the practitioner's reflections by illustrating examples of typical statements. Finally, we summarized the suggestions for early childhood care and education "After COVID-19" in Japan.